人民愛の世界



朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
2025

人民愛の世界

朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
2025

まえがき

人民への熱烈な愛を天稟とし、人民のために自分の全てを尽くしている敬愛する金正恩（キムジョンウン）総書記。

生まれ育った故郷のように祖国を愛し、人民の喜びと幸福に革命を行う楽しみと誇りを感じる総書記の高潔な人生観は万人を感動させている。人民の愛国心を高く押し立て、心やさしい人情味をもって人民のためを思い、人民の願いを叶え、人民との約束を違えることなく守る金正恩総書記を、人民は親しい慈父と呼んでいる。

人民は、人民の理想と幸福を実現するための献身の道を歩み続ける総書記にお会いして、注ぐ愛情があまりにも熱くて感激にひたって仰ぎ見、総書記に再び会う日を待ち焦がれている。

行く先々で人々に恩情を注ぎ、大きな幸福を抱かせる金正恩総書記の幾多のエピソードの中で一部を伝える。

目　次

1. 高潔な人生観

一日の概念

ある日の早朝。

時間の流れを忘れたかのように思索と探究を続ける敬愛する金正恩総書記に一幹部が、もうすぐ夜が明けるから、少しでも睡眠をとってはと進言した。まんじりともしないで一夜を明かしたのに、今からでも休まないと、今日の執務を続けられないのではと思ったのである。

彼の心中を察した総書記は、自分は今日という概念について皆さんと違った見方をしていると言った。

総書記は、一般的に人々は今日について一日の仕事が終わる晩または夜の零時までを念頭に置いている、しかし、私は今日を翌朝の5時までと見なしている、だ

から先ほどの5時に一日の仕事を締めくくり、今日の計画を立てている、と言った。

その言葉を聞いた幹部は深く感動した。

（早朝5時といえば、われわれ皆が翌日と見なし、夢の中にいる時間ではないか。その時刻まで前日の仕事を続けるなら総書記同志の今日とは……）

彼の心中を読んだかのように、総書記はおもむろに言った。

「私は幼いときから徹夜で仕事をする習慣がつき、今はそれが一つの生活法則となりました。

静かな夜に思索を集中するのが一番です。夜を徹して苦心して問題の解決策を見いだしたときには、頭がすっきりし、積もった疲れが一瞬に消え去ります」

昼間には仕事をし、夜に睡眠をとるのは人間の生理的要求であり、それで睡眠は一日の疲れを癒し、翌日の元気を補う必須の過程だと言われてきた。人間の肉体的能力にも限界があり、張り詰めた仕事が持続すれば必ず肉体的疲労が伴い、その疲れを癒すには適切な休息が必要なのである。

しかし、意志力の噴出だとばかり言えない総書記の一日一日は、人民のために自ら重荷を背負って超人的な精力と責任感でつなげる一瞬一瞬の連続である。

ある年、大漁をもたらした東海岸の某水産事業所を視察したときのエピソードも、総書記の風変わりな一日を物語っている。

魚と入り混じって落ちる海水が衣服に飛び散り、床に流れる水が靴を濡らしたが、終始満足げな微笑を浮かべていた総書記は、魚を沢山獲ったという報告を受けたのは午前2時過ぎだったが、あまりにも嬉しくて我知らず肩踊りをするほどで、眠ることもできなかった、と言った。

いつだったか、総書記は自分には常に二つの願いがある、一つはわが人民が何うらやむものなく豊かに暮らす共産主義理想郷を一日も早く見ることであり、もう一つは睡眠である、本当にぐっすり眠りたい、と真情を吐露した。

愛国についての講義

ある年の4月。

金正恩総書記の接見を受けるために控え室で待っていた幹部たちの話題は、故郷への思い出に移った。

竹馬の友と遊んだ頃の話、故郷の歴史遺跡・遺物や特産物……

彼らが話に夢中になっていたとき、控え室に入った総書記は何の話なのかとやさしく聞いた。

一幹部が、おのおの自分の故郷の自慢をしていると答えた。

総書記は明るい顔でうなずき、彼らのそばに腰を下ろして、革命家は自分の故郷を忘れてはならないと言った。

「自分が生まれ育った故郷を愛し大切にしない人は、祖国のために一命を賭して戦うことができません。それで、郷土愛はすなわち祖国愛と言うのです」

深い思いにふけっている彼らを見回した総書記は、幹部は自分の故郷を愛してこそ祖国を愛し、祖国のために一命をためらうことなくささげることができると強調した。

続けて、「私はわが国、わが祖国の全ての郷土を私が生まれ育った故郷のように愛しています」と言った。

幹部たちの脳裏には、数年前、皆さんがこの地の一草一木も自分の体の一部分のように大事にし、外国のものより自国のものを大切にする愛国心を抱いてわが国、わが祖国の富強・繁栄のために自分の魂と熱情を全てささ

げていく真の人間になるものと信じてやまないと言った総書記の言葉が浮かんだ。総書記は深く感動している彼らを見回しながら、私はわが国、わが祖国が一番だと思っている、私は一生わが国、わが祖国の息子として忠実に奉仕していくつもりだ、と言った。

革命を行うやり甲斐

いつだったか、金正恩総書記はある食品工場の近代化が終わったという報告を受けた。

その工場は、人民軍軍人に供給する食品を生産する今一つの立派な創造物であった。

総書記はたいそう喜び、国事に多忙をきわめる中でも工場に足を運んだ。

総書記は工場を見て回って非常に満足した。そして、規模や生産能力、近代化の水準を見てもこのような食品工場はわが国にまたとない、この工場は、わが国の食品工場のモデル、標準であり、内も外も素晴らしい工場、世界に誇るに足る工場だ、と重ねてたたえた。

基礎食品職場を満足げに見て回り、その建物から出ようとしていた総書記はふと足を止めた。そして工場の幹部に、味噌の味を見よう、味噌を一袋持って来

い、と言った。

味噌の味を見た総書記は、随員たちにも味を見るように勧めた。

「味噌の味がいかがですか」

「本当に味がよいです」

ところが、総書記は、違う、味噌の色と味が以前よりずっとよくなったが、まだほろ苦い味が残っている、と言った。

大豆とトウモロコシの混合比を聞いた総書記は、生産を高いレベルで正常化するためには原料と資材をしっかり確保し、設備管理と運営を正しく行い、製品の質の向上に大きな力を注ぐべきだと強調した。

この日、工場をくまなく見て歩いた総書記は、出発に先だって自分の心情をこう披瀝した。

「子どもたちを祖国防衛の前哨に送った父母が、人民軍にこのような工場があることを知るなら、どんなに喜ぶことでしょうか。それを考えれば、胸が一杯になります。このようなやり甲斐があって革命を行うのではないでしょうか。今後、一層奮発してわが軍人により多くの食品を供給しましょう」

休息も先に延ばし、現地指導を続ける日々に総書記が望むのはただ一つ、人民と軍人の喜びと幸福であ

り、人民と軍人のために献身することに革命を行う楽しみと生きがいを求めることである。

革命家の楽

2014年6月6日、金正恩総書記は朝鮮少年団創立68周年に際して万景台(マンギョンデ)革命学院を訪れた。

この日、総書記が新たに建設された総合体育館を見て回るときであった。

玄関ホールに踏み入った総書記は、体育館を見事に建設したとし、「この体育館はわが国にある体育館の標準です。本当に気に入ります。大満足です」と喜ばしげに言った。

満面に微笑をたたえた総書記は、語を継いだ。

――このような体育館はどこにもない。この体育館は、われわれが全人民の心を込めて建てた誇るに足る建物である。……

2年前の1月、万景台革命学院を訪れて体育館を見て回った総書記は、建設されて久しく、暖房も利かない体育館の冷たい床に手を当ててみ、学院に立派な体育館を建てることを決心した。

総書記は、当該の設計機関に体育館の設計を進

める課題を与え、外国の資料も参考するよう措置を取った。

その後、設計形成案を検討した総書記は、不備な点を一つ一つ指摘するなど、生徒たちに立派な体育館を提供するため設計の検討に心血を注いだ。

1回、2回……5回、6回……

こうして、体育館の設計は9回目にようやく総書記の承認を受けた。

総書記の細心の指導を得て完成された設計案に従って、万景台革命学院の体育館は地上1階、地下2階のユニークな形式で建てられた。

体育館を見て回りながら終始笑顔を絶やさない総書記に、学院の責任幹部が、みんな学院の体育館が地上宮殿、地下宮殿を彷彿させると感嘆している、と言った。

総書記は軽くうなずき、このような体育館は金日成(キムイルソン)同志と金正日(キムジョンイル)同志の崇高な次代愛をしっかり受け継いでいくわが党だけが建てられるものだと言った。

そのとき、学院の責任幹部は、学院を参観した外国の人々から運動場になぜ観覧席がないのかと聞かれたことがあると言った。一言で言って、観覧席がなければ原価をどう回収するのかということであった。

学院の幹部が、この運動場は金儲けのために作ったのではない、金正恩総書記の計らいで生徒たちが思う存分走り回れるように無償で提供するものだと答えたところ、彼らは驚きを隠さなかった。

その話を聞いた総書記は、微笑を浮かべ、外国人にこの体育館をこれ見よがしに誇るべきだと言った。そして、何か不備な点はなかろうかと玄関ホールを再び注意深く見ていた総書記は、生徒たちに一つを贈っても最上級のものを提供すべきだと強調した。

体育館の内部を見回しながら総書記は、見れば見るほど素晴らしい、今後、体育館は全てこのような様式で建設すべきだ、とし、「万景台革命学院の体育館は党の意図を実現したモデル体育館、誇るに足る体育館です」と改めて高く評価した。

このとき、万景台革命学院の卒業生である学院の責任幹部が、総書記に自分たちが学院を卒業してから40余年の歳月が流れたが、あのときより教育環境が100倍も改善されたと言った。

総書記は朗らかに笑い、建築物を一つ建てるのは容易なことではないが、このように立派に建設すれば甲斐もあり、大きな誇りと喜びも感じることができるとし、語を継いだ。

「革命家にとって大きな楽は、自分の手で祖国の万代の財産を一つ一つ作り出し、増やすことです。

革命家はこのような楽があって革命を行うのであり、祖国の財産を増やす闘争に自分の知恵と情熱を尽くすものです」

大切な財産

2019年10月のある日、金正恩総書記は仲坪(チュンピョン)地区の温室農場建設場を訪れた。

軍人たちが建設した新しい文化住宅を見て回った総書記は、ある低層住宅の玄関の前で立ち止まった。

住宅の外部を眺めた総書記は、軍人たちが立派な住宅を建設したと満面に微笑をたたえた。

そして、住宅を幾つの様式で建設したのかと聞き、すこぶる満足した。

住宅地区に建てられた低層住宅の様式は、その独特な美を生かしながらも多様になっていたのである。

やがて、1階1号室に入った総書記は、洗面所と台所など内部を見回した。居間に入っては天井を見上げて施工を遜色なく行ったと褒めた。

同行した幹部たちも天井から目を離さず、専門左官

はだしの腕前だと感嘆した。

総書記は豪快に笑いながら言った。

「そうです。素晴らしい住宅です。人民が本当に喜ぶことでしょう。温室農場の従業員がこのように立派な住宅で生活するようになれば、口からひとりでに『われら幸せ歌う』の歌声が出てくるでしょう。

軍人たちが私の願いをもう一つ叶えてくれました。彼らが本当にご苦労でした」

総書記が褒めると、部隊の指揮官は感激して言った。

「今回の建設過程で軍人の技能がかなり向上しました」

総書記は、このような過程を通じて軍人が思想的に鍛えられ、作業にも習熟するようになると言い、部隊指揮官の誇りに満ちた言葉を肯定した。そして、居間の内部を再び見回してこう語った。

「軍人たちが立派なことをした。本当にご苦労だった。

今日、私が住宅を見て回りながら大満足したことを軍人たちにきっと伝えてください」

部隊の指揮官たちは総書記を仰ぎ、「本当に有り難うございます」と感謝した。

1階1号室から出て2号室に立ち寄った総書記に、部隊の指揮官はこれらの住宅は某区分隊の軍人たちが初めて建設したものだと言った。

総書記は、仲坪温室農場の温室と育苗場、農村文化住宅は軍人たちが創造したものなのでより大切な財産だと言った。

実際、軍人たちには建設の経験がまったくなかった。その軍人たちが初めて建てた住宅なので、専門の建設者が建てた住宅に比べてどういう評価を受けるか内心心配していた指揮官たちであった。

総書記は指揮官たちに、最高司令官が軍人たちの愛国心を高く評価したということを必ず伝えてほしいと頼んだ。総書記は住宅の前に建設した休息場へ向かいながら、自分の切たる心情をこう語った。

「今日は本当に気持ちがいい。土埃だけがひどく立っていたここに、このような大規模の温室農場が立派に立ち上がったのだから、なんと素晴らしいことか」

2．愛国心を持たせて

高山の赤いリンゴ

田野や山に五穀百果たわわに実るある年の秋のこと。

ある日、敬愛する金正恩総書記は高山（コサン）果樹総合農場を訪れた。

農場で大豊作をもたらして人民に美味しい果物をより多く供給できるようになったことがあまりにも嬉しくて、万事をさしおいて急行したのである。

農場の各所を見て回りながら満足げに最高の評価を与えた総書記は、随員たちに、平壌（ピョンヤン）に帰ったら高山果樹総合農場の果物大豊作のニュースを全国に紹介・宣伝するつもりだと言った。

このとき、農場の一幹部が総書記に、ヘクタール当たり50トンの生産目標を達成したリンゴ畑が多いと誇

らしげに報告した。

すると総書記は、それは本当なのか、それでは早く行ってみようと言い、先頭に立って歩みを運んだ。

しばらくしてリンゴ畑に到着した総書記は、リンゴの木を眺めながら、枝ごとに美味しそうなリンゴが本当に沢山実っている、と満足した。

そして、収穫したばかりのリンゴが一杯盛られた果物運搬容器の前に近寄り、大きなリンゴを一つ手にしてこう言った。

「リンゴが全て大きく旨そうです。リンゴがあまりにも真っ赤なので、赤色で染色したのではという気がするほどです」

朗らかに笑っていた総書記は大股でリンゴ畑に入った。

そして、見事に実ったリンゴを何回もさわってみて、本当に素晴らしい、どうすればリンゴがこんなに赤くなるのかと、楽しそうに言った。

リンゴからなかなか目を離せない総書記に、農場の幹部は、わが農場の従業員は敬愛する金正恩総書記がおいでになったらこの素晴らしい光景を見てもらいたい一念で今まで収穫せず、一株一株を丹精して手入れしてきたと言った。

枝ごとにたわわに実った赤いリンゴを心地よげに見

つめていた総書記は、感心した語調で言った。

「高山果樹総合農場の幹部と従業員が、リンゴの花が咲く季節から赤く実った今日まで私の来る日を指折り数えて待ちながら一株一株真心を込めて手入れしたとのことですが、彼らの衷情と愛国的熱意が合わされてリンゴがさらに赤くなったようです」

高い評価にこもった意味

2013年5月中旬のある日、金正恩総書記はある人民軍部隊を視察した。

部隊長の迎接報告を受けた総書記は、遠路の疲労も忘れたかのように明るい笑顔で言った。

「周辺の山がうっそうと茂り、構内にも木が沢山植えられているのを見ると気持ちがよいです。樹林化、園林化がよくなされ、空気も新鮮です」

部隊長の胸は高鳴った。

以前、他の部隊にいたときも部隊の構内と周辺の山に多くの木を植えて金正日国防委員長から高い評価を受けたのに、今日またこのように金正恩総書記の身に余る賞賛を受けてみると、この世の幸福を独り占めしたかのような気持ちであった。

そのような彼を満足そうに眺めていた総書記は、部隊に来ながら指揮部を設置して間もないので不十分なところが少なくないだろうと考えていたが、新設部隊という感じが全くしない、と今一度満足を表した。

運動場で部隊の将兵と記念写真を撮った総書記は、青い芝生で覆われた運動場を見て、芝を植えると見た目にもよく、埃も立たなくてよい、と言った。

総書記の賞賛は続けられた。

——指揮部の全景を見ると、新設された部隊ではあるが、本当に多くの仕事をやり遂げた、木を沢山植えたので樹林が生い茂っており、空気が澄んでいて本当に気持ちが爽やかである。

部隊指揮官の脳裏には、前年の3月、ある軍部隊を訪れて幹部たちと一緒に持参のチョウセンハリモミとシラタマモクレンを植えながら、木の植え方についてまで具体的に教えていた総書記の姿が思い浮かんだ。

総書記は道路の両側にずらりと並んで立つ高い街路樹を指して、木を沢山植えるとなんと素晴らしいことかと言い、ある中隊へ向かう道でも「沢山の木が青々と育つ構内を歩いていると、『山麗しく水清い美しいわが国』という歌がおのずと出てきます」と詩を詠むように楽しそうに言った。

そして、中隊兵舎の軒下につくっておいた生け垣を見て軍人たちの主人としての姿勢を推し量り、今日、この部隊に来てみた甲斐がある、この部隊は離れたくない部隊、ずっと立って眺めたい部隊だ、と再び身に余る評価を与えた。

スポーツ選手に刻み付けた愛国の志

ある日、金正恩総書記は、国際競技で祖国の栄誉を輝かせたスポーツ選手たちを呼び寄せた。

満面に明るい微笑をたたえて選手と監督たちの競技成果を祝った総書記は、皆さんはわが祖国と人民の誇りであると高く褒め称えた。彼らを頼もしいまなざしで眺めていた金正恩総書記はこう尋ねた。

「競技場へ出るとき、何を考えますか」

選手と監督の脳裏には競技を前にしたときのことが走馬灯のように思い浮かんだ。

相手のチームをどうしても圧倒する戦術案を噛みしめるときの張り詰めた雰囲気、重い圧迫感が胸を抑えていた瞬間などなど……。

その度に自分らの競技を祖国が見守り、敬愛する金正恩総書記が見守っているという考えに百倍、千倍の力と勇気を奮い立たせていた彼らであった。

一人の責任監督がそのときの心情を込めて、金正恩総書記がわれわれの競技を見守っておられると考えていたと丁重に答えた。

彼の言葉を聞いた総書記は、選手と監督たちを見回しながらこう言った。

——皆さんの胸に何をつけているのか。ほかならぬわが共和国旗をつけている。この共和国旗を守り、わが祖国の名誉を轟かせるという考えを持って競技を行うべきだ。

総書記は、厳かな感情にひたっている選手と監督たちに、競技が行われる間、彼らのことを思い、競技ニュースを待っていた自分の気持ちを披瀝した。

総書記は、自分は祖国を発つ皆さんを平壌国際空港の滑走路の側で静かに見送りながら、われわれの選手と監督たちが立派な成果を収めて帰国することを心から願ったとし、わが人民と軍人も皆自分と同じような心情であったろうと言った。

瞬間、選手と監督たちはびっくりした。

自分たちが祖国の大地を蹴って飛び立つ飛行機の中で興奮に包まれているとき、金正恩総書記が空港の滑走路で見送っているとは夢にも思わなかったのである。

この日総書記は、われわれの選手たちが競技ごとに痛快に勝利して栄誉の壇上に上ることができたのは、表彰台の高さはすなわち祖国の高さだという自覚を持って常日頃汗を惜しみなく流して訓練を重ねた結実だとし、金メダルを獲得した選手と監督たちを高く評価し、大きく表彰するよう指示した。

いつしか時間がかなり流れて、選手と監督たちが総書記と別れる時が来た。

総書記は、別れを惜しむ彼ら一人一人の手を取りながら強調した。

——わが党の頼もしいスポーツ戦士たちが今後も、より大きな勝利を獲得するために奮励努力することによって、アジアの覇権、世界の覇権を争う国際競技で金日成民族、金正日朝鮮の尊厳と威容を全世界に宣揚するものと確信している。

愛国者と高く評価して

2020年10月、金正恩総書記が金化（キムファ）郡災害復旧現場を視察した日のことである。

わずか40余日という短期間に自然災害の痕跡をなくした金化郡の変貌ぶりは見るほど素晴らしかった。

見違えるほど変わった郡の様子をしばらく眺めてい

た総書記は、郡内の住民が喜んでいるのかと重ねて尋ね、彼らが皆喜ぶならそれ以上望むことはない、時代的立ち遅れを一掃し、わが党の構想する理想的な文明社会にふさわしい文化住宅で人民が幸せな生活を取り戻すなら、それ以上嬉しくてやり甲斐のある闘争はどこにもまたとないだろう、と言った。

この日、総書記は初西（チョソ）里所在地の住宅建設場にも立ち寄った。

山のふもとに整然と立ち並び、あたかも査閲を受ける閲兵縦隊のように素晴らしい村の全景を眺めていた総書記は、満足した語調でこう言った。

「住宅を新しく建設するようにした甲斐があります。邑地区の住宅とは全く異なります」

幹部たちは総書記の視線を追って、素晴らしい変貌を遂げた農村の格別な光景に感嘆していた。

このとき、一幹部が総書記に、初西里所在地の村が山麓のうってつけの場所に建てられたと得意げに言った。

それを聞いた総書記は、村の方を再び見渡してから、裏山に木がないことに触れた。

自責の念に駆られている幹部たちに向かって、総書記は、村の前方の山を指差しながら、それでもあの山に

は木があるね、と言って明るく笑った。

初西里村の裏山とは違って前方の山には、遠くから見ても数十年育ちの青々としたチョウセンゴヨウマツが生い茂った樹林をなしていた。

そのチョウセンゴヨウマツ林を眺めながら歩みを移せずにいる総書記の目には微笑がただよっていた。

やがて総書記は、誰が何年前にあのチョウセンゴヨウマツを植えたのかと尋ねた。

一幹部が、40余年前の郡党責任幹部が郡内の人民と共に植えたものだと答えた。

しばらく満足したまなざしでチョウセンゴヨウマツの生い茂っている前方の山を眺めていた総書記はこう言った。

――あの山にある数多くのチョウセンゴヨウマツを、40余年前に金化郡党責任書記が郡内の人民を動員して植えたそうだが、彼は立派な仕事をやり遂げた。……

そのチョウセンゴヨウマツ林は40余年前、郡党責任書記を務めていた幹部が郡内の住民と共にやせた地を肥やし、役に立たなくなった樹木を整理しながら大事に手入れして造成した山林であった。チョウセンゴヨウマツ林が生い茂る将来を思い描きながら、かげひなたなく毎日のように住民の先頭に立って真心を込めて手入れしたチョウセンゴヨウマツ林なので、歳月が流れるにつれて樹林はうっそうと茂り、面積も日ごとに増えて、今は全郡が誇る国の財産となった。

青いチョウセンゴヨウマツ林と共に一幅の絵のように見渡される前方の山から目を離せずにいた総書記は、幹部たちを振り向いてこう言った。

「金正日同志はそのような人が愛国者だと述べています」

そして、チョウセンゴヨウマツ林の造成に寄与した40余年前のその郡党責任幹部を愛国者だと高く評価した。

当人は数十年前にこの世を去ったが、金化郡の誇る立派な愛国者として郡の沿革に光を放つようになっただけでなく、江原道（カンウォン）の愛国烈士と並んで永遠の生を享受するようになった。

3. 厚い人情味

記念写真にこもった温情

人民軍の戦闘力と勇敢さを示す戦車兵の競技大会が行われたときのことである。

金正恩総書記は競技の成果を祝い、戦車兵たちの労をねぎらって優勝した軍人たちと記念写真を撮りたいと言った。

われがちに駆けつけて総書記の近くに立とうと押し合いへし合いする彼らの中には、戦車の砲塔の上でまでよい場所を占めようと競り合う軍人たちもいた。人より背の低い一人の軍人は、涙が出るほどもどかしがった。

彼も総書記の近くに立とうと必死になったが、屈強な軍人たちにかなうことができなかった。

総書記は優勝した戦車兵が自分の位置についている

のかを確かめ、彼らの真ん中に立った。

いらいらした背の低い当の軍人は、前列に立った兵士たちの肩の上に顔を出そうと力一杯かかとを上げて背を伸ばした。だが、自分の顔がどうしてもカメラのレンズに収まらなさそうで、ますます気を急かせた。

そのときだった。

総書記がふと後ろを振り向いた。

「前の人に邪魔されて顔の見えない人はいないかね」

その軍人は嬉しさのあまり「ここにいます！」と叫んだが、それは心の中で響くだけだった。

後ろの軍人たちを見回していた総書記は、一人の軍人を見て「君は背が低くて顔が見えない。前の方へ出なさい」と言い、自ら彼を前列に立たせた。

彼が羨ましい目でその兵士を眺めていると、再び後列の軍人たちを一瞥した総書記の視線が自分に届くのではないか。

「君も背が低くて前が見えないだろう」

総書記の思慮深い音声に、彼はまるで夢を見るような心地だった。

総書記が自分の手を温かく取って自身の側に立たせてくださったとき、彼はそれが夢でない現実であると悟った。

総書記は彼の手をしっかり握っていたのである。その軍人は明るい笑顔でカメラを見つめた。

その瞬間を待っていたとばかりにフラッシュが閃いた。

平素人より背が低いことで思い悩んでいたその軍人は、記念写真を撮る意義深い場で、総書記の細やかな心遣いによってこの上ない光栄に浴したのである。

記念写真にまつわる感動的な事実は、金正恩総書記が江西（カンソ）薬水工場を現地で指導する際にもあった。

総書記は写真を撮る前に、近くに立っている一人の女性労働者の顔がよく写らないのではと気を遣った。

意義深い記念写真に自分の顔をはっきりと写したいと切願する女性労働者の気持ちにまで気を配った総書記は、それでも安心ができず、カメラマンに皆よく見えるのかと聞いた。前列は座るのがよさそうだという答えに総書記は、後列の人たちの顔がよく見えるよう前列の人たちは座るのがよいと言った。

残念な思いをするところだった彼女らは、総書記の近くでこれ見よがしに明るく笑って記念写真に収まった。

このような事実は枚挙にいとまがない。

その中には、部隊視察を終えて帰りがけの総書記が引き返して勤務遂行中の女兵士たちと撮った写真もあり、

記念撮影に参加できなかった身の不自由なある事業所支配人の妻と、以前の政治指導員や祖国の栄誉を輝かせた女性卓球選手を呼び寄せて撮った写真もある。

二人の指揮官の感動

いつだったか、金正恩総書記がある人民軍部隊を視察したときのこと。

総書記を部隊に迎えた感激で指揮官と兵士たちは互いに抱き合い、喜びを抑え切れずにいた。

ところが、彼らと席を共にすることができなかった人が二人いた。その区分隊の中隊長と中隊政治指導員だった。

（折もあろうに、敬愛する最高司令官同志が区分隊を訪れたときに病気になるとは……）

二人の指揮官は残念な思いをしながら、自分の部屋で窓の外をとめどなく眺めていた。

ところがこのとき、早足で駆けてきた部隊幹部の高ぶった声が窓の外から聞こえた。

「敬愛する最高司令官同志のお呼びです」

「えっ？　本当ですか」

二人は聞き違えたのではとわが耳を疑い、あたふた

と外へ出た。
何歩か走っていた彼らは考え直した。
（いけない。病気の身で敬愛する最高司令官同志の前に立つことはできない）
二人の指揮官はその場に立ちすくんでしまった。
すると、部隊の幹部は彼らの手を取ってこんな話をした。
部隊指揮部の各所を見て回ってから区分隊の兵営に入った総書記は、中隊長と中隊政治指導員はなぜ見えないのかと尋ねるかのように幹部たちに目を向けた。
しばらくまごついていた部隊の幹部が総書記に、彼らは今風邪を引いていると答えた。
すると総書記は、それでも会ってみようと言ってこう続けた。
「中隊に来た最高司令官が指揮官たちに会わずにそのまま帰れば、彼らはどんなに寂しがるでしょうか」
総書記は語を継いだ。
「中隊長と中隊政治指導員が風邪を引いたそうですが、風邪ではなく重病にかかったとしても会いたいです」
駆けつけてきた中隊長と中隊政治指導員は、興奮を抑えて敬愛する総書記に丁重にあいさつした。

彼らのあいさつを受けた総書記は明るい微笑をたたえてこう言った。
「中隊長と中隊政治指導員に会えて嬉しいです。皆さんと共に中隊を見て回ろうと、呼んで来させました」
その瞬間、二人の指揮官は「敬愛する最高司令官同志！」と感極まって叫び、総書記の懐に顔を埋めた。
総書記は彼らの肩を軽く叩いてやり、君たちは風邪を引いたそうだが、今後健康に留意しなければならない、とおもむろに言った。
総書記は満面に笑みをたたえて彼らと共に中隊を見て回った。

兵士たちの眠りを守って

ある年の初春の夜の零時をはるかに回ったときのことである。春とはいえ、まだ寒さが長引いて天気は非常に冷たかった。夜が明けるにはまだ時間がかなりかかりそうなそのとき、金正恩総書記は人民軍のある部隊を訪れた。
兵士たちがぐっすり眠りに落ちていたときなので、部隊は静まり返っていた。

総書記を軍営に迎えるようになった部隊の指揮官たちは喜びを抑え切れず、眠っている兵士たちを起さなければならないと思っていた。

彼らは、総書記が人民軍部隊を訪れるたびに兵士たちから先に会うことをよく知っていた。

そんな指揮官たちを見回していた総書記は、つぶやくように言った。

「まだ夜中なので軍人たちには会えないにしても、彼らの眠っている姿でも見ないと、気が休まりそうもありません」

総書記は軍人たちがどこで寝ているのかと聞き、寝室へ向かった。

やがて総書記は、兵士たちが深い眠りに落ちているある小隊の寝室に足を踏み入れた。

わが家の暖かいオンドルでのように大の字になって寝る兵士、暑いせいか毛布をはね除けたまま寝る兵士、片足を他人の腹の上に乗せていびきをかく兵士……。

心地よく眠っている兵士たちの姿を頼もしげに眺めていた総書記は、寝室が暖かいためか軍人たちがぐっすり休んでいるとすこぶる満足した。そして、夜明け頃に寝室の温度が下がることはないか心配そうに

聞き、しばらくの間寝室の温度を確かめた。

総書記は部隊の指揮官に軍人たちの寝室がまた他にもあるのかと尋ねた。他にもあるという答えを聞いた総書記は、そこへ行ってみようとして先頭に立ってそこへ向かった。

幹部たちが総書記の後に続いた。やがて他の寝室のドアの前に至った総書記は、軍人たちが眠っているから静かにしろと幹部たちに注意を与えた。

幹部たちは、足音はもちろん息までひそめて静かに歩みを移した。

寝室の中に入った総書記は、ぐっすり寝入った兵士たちの姿を長らく眺めていた。

暖かい空気、日焼けした兵士たちの顔、寝相の悪い兵士、素晴らしい夢でも見ているか顔をほころばせる兵士……。

総書記は久し振りに兵士たちの汗の臭いを嗅いで見たね、と言ってにこにこした。

静まり返った寝室から聞こえるのは、兵士たちの安らかな寝息と時計の秒針の動く音だけだった。

総書記は幹部たちに、軍人たちを起こしてはならないから速く出ていこうと言った。

寝室を出た総書記は、満足した目で幹部たちを見回

しながら言った。

——気楽に眠っている兵士たちの姿を見ると、積もっていた疲れがすっかり取れるようだ。

この日、総書記は部隊の各所を見て回りながら軍人たちの生活状況を確かめ、兵士たちが起床する前に部隊を後にした。

特恵措置が講じられた後

延社(ヨンサ)郡新章(シンジャン)農場は北辺の深山奥地に位置しているさほど大きくない農場である。そんなわけで、以前はこの農場を知っている人より知らない人がより多かった。しかし、今日、この農場はしばしば多くの人の話題に上り、忘れられない日々を感慨深く振り返っている。

この農場には心温まる温情がこもっている。

2021年12月末。

朝鮮労働党中央委員会第8期第4回総会では、協同農場（当時）の経済的土台を補強するための重要な対策の一つとして、農場が国家に償還できなかった巨額の貸付金の返済を全額免除するという特恵措置が講じられた。

国家が莫大な損をしながらも農村に有利な財政的・物質的条件を提供するために講じた重大措置に接した

全国の農業勤労者と人民は、農業生産で新しい飛躍を引き起していく熱意に満ちていた。

しかし、そのとき新章農場の幹部と農場員は皆が残念がっていた。それもそのはず、特恵措置が発表される数日前に国家から受けた貸付金を償還したからである。

一部の農場員は、他の農場は受ける特恵も受けられなくなったとして愚痴をこぼし、いつになったら農場が腰を伸ばせるものかと憂慮もした。

彼らの声は農場の幹部たちの心を重くした。

しかし彼らは、どれほど思慮深い愛の手が自分たちに差し伸べられているかを夢にも考えられなかった。

党中央委員会第8期第4回総会が終わって何日か経ったある日。

幹部たちと席を共にした金正恩総書記は、党中央委員会第8期第4回総会で農場が国家から貸付を受けて償還できずにいる資金を全額免除するという特恵措置を講じたが、この措置を講じる数日前に償還した資金は農場に返すべきだと言った。

総書記は、咸鏡(ハムギョン)北道延社郡新章協同農場が農場の資金を全部集めて国家から貸付を受けた資金を昨年12月24日に償還したことを非常に残念に思っているとのことだが、その資金を農場に返すべきだと言った。

その日、新章里の家々には夜遅くまで明かりが消えなかった。

大小の国事をつかさどる総書記の心の中に自分らの農場も大切なものとして宿っているという自負、平壌から数百里も離れた名も知られていない農場の暮らし向きにまで細やかに気を配る総書記への感謝の念、営農に励んで総書記の恩恵に必ず報いるという誓い……。

山村の夜は静かに更けていったが、新章里の人々はこのような思いでどうしても眠ることができなかった。

その後、この農場の幹部と農業勤労者は覚悟を決めて農作業にこぞって立ち上がり、立派な結実をもたらした。

これはただ新章里にのみあったことではない。

特恵措置の後、全国の数百の農場にも償還金が返されたのである。

夢が叶った卓球選手

ある年の5月のことである。

ある卓球選手は、金正恩総書記の前で試合をするようになった。

総書記は試合を終えた彼を身近に呼んだ。

彼は、総書記のところに駆けつけて丁重にあいさつをした。

卓球選手を温かいまなざしで見つめていた総書記は、年は幾つなのかと尋ねた。

総書記は彼の答えを聞いて、体育団の選手生活は難しくないのかと再び尋ねた。

「難しくありません」

彼の活気に満ちた答えに総書記は語を継いだ。

「君を見ると、世界卓球女王になった朴英順（パクヨンスン）選手の腕を組み、明るく笑って記念写真を撮った金日成同志の慈愛深い姿が思い浮かぶね」

朴英順はその卓球選手の母親であった。

彼女は試合で最後の一点まで気を落とさず頑張って、ついに世界卓球女王に輝いたのである。

朴英順選手が第33回世界卓球選手権大会女子シングルスで有名な選手たちを破って世界選手権を獲得したのは19歳のときだった。

全世界が朝鮮の卓球女王に賛辞を惜しまず、国際卓球連盟の大会組織委員会は、彼女に世界卓球選手権大会の史上前例のない世界卓球女王称号と王冠やチャンピオンサッシュと共に優勝カップを授与した。

金日成主席と金正日国防委員長は、彼女があまりに

も奇特で頼もしくて自ら彼女に会い、祖国の栄誉を全世界に輝かせたスポーツ英雄だと高く評価し、記念写真も撮り贈物もしたのである。

それに力づけられた朴英順選手は、第34回世界卓球選手権大会女子シングルスで再び優勝して2重世界卓球選手権保持者となった。

金日成主席と金正日国防委員長は、その後も数多くの国際競技で優勝した彼女を、誰もが羨むよう栄光の壇上に立たせた。

朴英順選手の息子はこみ上げる感激で胸が一杯になり肩を震わせた。

その姿を見つめて胸を痛めていた総書記は、次のように言った。

「本当に惜しい人をあまりにも早く失いました。

朴英順選手が国のスポーツ技術発展に寄与した功績からしても、われわれが息子をよく見守るべきです」

卓球選手の目から涙がしたたり落ちた。

彼は2歳のときに母を失い、誰よりも母を懐かしがっていたのである。

彼が気をしずめるのをしばらく待っていた総書記は、今後どんな仕事をしたいのか、考えたことがあればためらいなく言ってみるようにと、彼の将来にまで気を遣った。

卓球選手は自分の夢と希望を腹蔵なく答えた。

総書記は彼の大切な夢と希望を全て叶えてくださった。……

そのことを伝え聞いた人々は、彼が有名な母のおかげをこうむっていると言った。

しかし当事者の言葉を聞いては、なおさら深い感動を受けた。

「決して母のおかげではありません。母が生きていても、私の夢と希望を全て叶えてくれることはできなかったでしょう。

われらの金正恩元帥が記憶し、押し立ててくださらなかったなら、母の生がそれほど輝くことはできなかったでしょう。そして、今日の私の幸せな生活についても考えることはできません」

約束を守って

2024年3月16日付の『労働新聞』には、金正恩総書記が朝鮮人民軍空挺部隊の訓練を指導した革命活動ニュースが報じられた。

その日、夜遅くまで総書記の革命活動ニュースを振り返りながら眠れずにいる一人の女性がいた。海州（ヘジュ）市烟陽（ヨンヤン）洞第44人民班に住んでいる金恵英（キムヘヨン）さんである。

（もしかしたら空挺兵を務める息子もその栄光の場に立っていたのではなかろうか）

こんな考えが脳裏にひらめいたが、彼女はすぐ諦めてしまった。 それもそのはず、軍隊服務年数の長くない息子はまだ新兵にすぎなかったからである。

しかし、胸の片隅では望みが現実になったらという期待感をどうすることもできなかった。

それから数日後のことである。彼女は空挺兵の息子が、党中央委員会の本部庁舎で、金正恩総書記と共に意義深い記念写真を撮ったという思いがけない知らせに接した。

あまりにも夢のような現実に、彼女はこみ上げる感激を抑え切れなかった。このことを伝え聞いた村の人たちも、平凡な労働者家庭が浴した栄光を自分のことのように喜び、心から祝った。

栄光の壇上に上った平凡な空挺兵、これには深いいわれがあった。

3月のある日。

不意の訓練命令を受けて輸送機から降下した空挺兵の中には、服務年数の短い一人の兵士もいた。

ところが、彼は激しい気流の影響で落下地点から遠く離れた険しい谷間に降りるようになった。

そのときの状況に応じて落ち着いて迅速かつ正確に行動していた彼は、ふと集結場所から響く万歳の歓呼の声を聞いた。

（敬愛する最高司令官同志が訓練場にお見えになったのでは……）

彼は、望みに望んでいた栄光の時刻を逃すのではという焦燥感に駆られ、あたふたとパラシュートと武具を規定通りに整えて急いで走り出した。

しばらくして彼の視野に乗用車の行列が入った。慌しく道ばたにどいた彼は、そのさなかでも軍服の襟を正して丁重に挙手の礼をした。

ところがこのとき、1台の乗用車が彼の側で立ち止まり、実に夢のような光景が繰り広げられた。

車窓が下ろされ、金正恩総書記が明るい笑顔で車の中から手を振って彼を手招くのではないか。

信じがたい現実を前にして一瞬まごまごしていたその兵士ははっと我に返り、総書記にあいさつをした。

総書記は彼のあいさつに応えて、どこに降りたのかと尋ねた。

彼が着地した場所を教えると、総書記は、やや低い声で「記念写真を撮れなかったろうね」とつぶやいた。

そして空挺兵に負傷はしていないかと再び尋ねた。

彼が大丈夫だと答えると、総書記は、安心した語調でこう言った。

「よろしい。後で平壌で再会しよう」

こんな約束を残した総書記は再び現地指導の道を続けた。

彼がこのことを話したとき、部隊の指揮官と戦友はすぐ信じようとしなかった。

祖国の富強・繁栄と人民の幸福のために寸暇を惜しんで献身する総書記が車を止めさせ、一人の平凡な兵士と平壌で再会しようという約束まで残したというのか。

訓練場で部隊に帰る準備をしていた空挺兵たちは、もう一度感動的な知らせに接するようになった。

金正恩総書記が記念写真の撮影に参加できなかった空挺兵たちを平壌へ呼んだのである。

平壌に到着した空挺兵たちは、一生にまたとない栄光と幸福の絶頂に上った。

総書記が記念写真を撮るために空挺兵たちを党中央委員会の本部庁舎に招いたのである。

撮影台に上って熱狂的な歓呼を上げる彼ら一人一人に微笑を送っていた総書記は、一番前列に立っている軍人が訓練の道で会った空挺兵だということを即座に確かめた。

彼のあいさつに応えた総書記は、肩を軽く叩きながら情を込めて言った。

「訓練の道で会った兵士じゃないか」

そして頼もしい空挺兵たちと共に記念写真を撮った。

総書記が人民軍の指揮官たちに、訓練の道で会った兵士との約束をきっと守ると言ったことを後で知った兵士は、喉を詰まらせた。

この事実を伝え聞いた金恵英さんは、金正恩総書記の大いなる信頼と温情があったがゆえに、平凡な労働者の子息が誰もが羨む栄光の壇上に上ることができたとして、自分の感激を吐露した。

4. 献身の道で

切なる頼み

前線西部の某人民軍部隊の軍人たちは、重要な実戦訓練に参加して平素鍛えてきた戦闘力を余すところなく発揮した。

これを知って誰よりも喜んだのは敬愛する金正恩総書記であった。

軍人たちを祝い、多くの給養物資を送るよう指示した総書記は、その部隊の指揮官たちを身近に呼んだ。

指揮官たちは軍人の一致した心を込めて感謝の言葉を述べた。

すると総書記は、兵士たちのためなら空の星をも取ってやりたい気持ちだ、火の雨が降り注ぐ最前線

の塹壕で兵士たちと生死も苦楽も共にし、彼らのために全てをささげようというのが私の決心だ、人民軍の指揮官は兵士のために自分を犠牲にする真の指揮官にならなければならない、と言い、このように続けた。

「人民軍の指揮官は『兵士に奉仕する！』というスローガンを常に胸に秘め、兵士の生活を親身になって見守らなければなりません。兵士を大切にし、彼らのために靴底がすり減るほど走りに走るのが人民軍指揮官の品性となるべきです」

深い感動にひたっている指揮官に向けて、総書記は語を継いだ。

――指揮官は常に兵士の中に入って履物はどうか、睡眠は十分にとっているかなどなど、生活の隅々に至るまで気を配り、兵士に暖かいすみかを提供するために懸命に努力すべきである、暖かいすみかとは、長兄や長姉のような指揮官や親しい同志がおり、盛り沢山な食卓や温かい寝床がある中隊のことである。兵士たちがこのようなすみかで生活をすれば、部隊と区分隊に対する愛着を感じ、祖国防衛の第一線に立っている栄誉と誇りを感じて、軍務生活にも一層励むはずである。……

総書記は一言一言力を込めて話を続けた。

「私は今日、人民軍指揮官と席を共にした機会に、あなたたちに兵士の生活をよりよく見守るよう切に頼むものであり、またあなたたちが私の頼みを必ず果たしてくれるものと信じています」

総書記を仰いで指揮官たちは、自分たちの一致した決意を込めて元気よく答えた。

そんな指揮官の決意を、総書記は明るい微笑を浮かべて聞いた。

喜びの中で見た誕生日リスト

数年前、金正恩総書記がある部隊を訪ねたときのことである。

寒風にさらされながら長時間にかけて軍人たちの訓練を見た総書記は、部隊の一日分貯蔵庫にも立ち寄った。

倉庫には、軍人たちの食生活水準を一目で窺わせる様々な副食物が一杯積まれていた。

倉庫の内部を満足げに眺めていた総書記は、歩みを移して何かをじっと見つめた。

それは、日付と軍人の名前がぎっしり書かれた誕生日リストだった。

明るい微笑をたたえて誕生日リストを眺めていた総書記は、誕生日を迎える軍人たちの名前と日付を書き記したのを見ると、誕生日の祝膳を整えてあげるようだと言って大いに喜んだ。

このとき、部隊の一指揮官が、軍人たちの食生活水準は平日にも高いが、誕生日にはスペシャル料理を給食していると自慢げに言った。

それを聞いて豪快に笑った総書記は、誕生日は本当に格別なものだ、誰もが親から聞いて自分の生まれた日を知っているが、誕生日を迎えると父母兄弟が一層恋しくなり、特別料理も食べたがるのだ、だから、軍人たちに誕生日の祝膳を整えてあげると、彼らはさぞ喜ぶだろう、と言った。

改めて誕生日リストを注意深く見ていた総書記は指揮官たちに、今日誕生日を迎える軍人もいると言って顔をほころばせ、彼に盛り沢山な祝膳を整えてあげるようにと強調した。

そして、同じ日に誕生日を迎える軍人たちもいることを知って、祝膳を別々にあげた方がよいとし、三つ子も結婚の時に一つの祝膳を受けるのは好まないと愉快そうな口調で言った。

この言葉にみんなどっと笑った。

祖国防衛の前哨に息子や娘を送り出した父母は皆、わが子の誕生日になると要らぬ心配で心を煩わすのである。

自分の家でのように盛り沢山な食卓についているのか、温かい寝床に入っているのか……。

ある島防御隊を視察した日にも総書記は、「中隊軍人の誕生日リスト」を見て、次のように語った。

軍人に誕生日の祝膳をあげるのを小さなことと思っているようだが、実は大きなことです、誕生日に御馳走を出し、戦友が祝いもすれば、彼らは軍務生活に一層励むでしょう、と。

政治指導員は軍人の誕生日を欠かさずに祝うべきだ、政治指導員の手帳には、軍人の誕生日と好きな料理、趣味と素質は何であり、身体上の弱点は何であるかが全部記されていなければならないとした言葉にも、兵士を思う総書記の温情がこもっている。

ヘアピンの一つにも

2012年1月、金正恩総書記は普通（ポトン）江畔に立派に建設された開店間近の未来（ミレ）商店を視察した。

売り場ごとにいろいろな商品がずらりと陳列されている店内を見渡しながら、素晴らしいデパートに来たようだと大いに喜んだ総書記は、家庭用品の売り場に次いで日用品の売り場へ歩みを移した。

一番手前のヘアピン売り場には、色とりどりの形と色合いの宝石ヘアピンが沢山陳列されていて、まるで美しい花壇を思わせた。

この宝石ヘアピンを手にして見た総書記は、「コスモス」ヘアピンはわれわれの女性にたいへん好まれている、この商店では女性がどんな形のヘアピンを好むのかをよく調べて工場に注文し、わが国の女性の好みに合うものを売るべきだとし、全ての商店では同じ商品でも客がどんな形の商品をもっと好むかをしばしば調べることが重要だと強調した。

翌日、総書記は幹部たちに会った席上で、未来商店で見た「コスモス」ヘアピンについて話した。

わが国で生産された「コスモス」ヘアピンを見て、その品質をさらに向上させるよう強調した金正日同志の言葉を思い起こしながら、総書記はこう言った。

——未来商店にある「コスモス」ヘアピンは、年のある女性には別段似合いそうもない。ヘアピンを若い女性だけでなく、年のある女性に似合うものも作

るべきだ。……

　それから数日後にも、その年の2月末にも総書記は、いろいろな「コスモス」ヘアピンをよく作るべきだとし、年齢別特性に応じて多種多様なものを作るよう重ねて強調した。

　そればかりではない。金日成主席の生誕100周年慶祝国家産業美術展示会場に出向いた日には、「コスモス」ヘアピンのデザインを見ながら、まだヘアピンの品目が少ない、世界的趨勢が絶えず変わっているだけに、新世紀の要請に即してさらに発展させなければならないと強調し、立派に改築された平壌児童百貨店では、「コスモス」ヘアピンの売り場に立ち寄って、われわれはアクセサリーを一つ作っても時代の美感に合い、われわれの美的感情に合うものを作らなければならないと語った。

　こうして、より多様化、多色化された「コスモス」ヘアピンはわが国の女性の好評を博するようになった。

海兵たちと共に

　2012年2月のある日、金正恩総書記は某海軍部隊を視察した。

　どうしても艦隊に来てみたくてやって来たと言いながら、軍人たちに自動小銃と双眼鏡を授与し、彼らと共に記念写真を撮った総書記は、管下の中隊の寝室や教育室、食堂をくまなく見て歩き、ふと部隊の指揮官に艦艇を機動させることができるかと尋ねた。

　彼は、いつでもできます、と元気一杯に答えた。

　その返答を聞いた総書記は、それでは魚雷艇に乗って海に出てみようと静かに言った。

　随員たちは両手を広げて立ちはだかった。荒波立つ海に出るのは極めて危険なことだった。彼らの気持ちを読み取ったかのようにしばらく口をつぐんでいた総書記は、その心遣いは有り難いが、わが海兵と共にいれば心配することはないと言って埠頭へ向かった。

　総書記の後に続く随員たちの気持ちは苛立った。

　大股で船に乗り、情のこもったまなざしで海兵たちを見回していた総書記は、今日スピードを上げて航行してみようと励ました。

　軍港を後にした船は次第にスピードを上げ始めた。荒波を衝いて進むたびに白い水しぶきが滝水のように甲板に降りかかった。

　船上に立ち、強い海風に衣服の裾をはためかせながら戦術訓練を指導する総書記を仰ぐ随員たちは、緊張

して胸を締め付けられる思いだった。

ところが総書記は始終、波の上を飛ぶように突き進む船の上で針路と速度、エンジンの回転数について具体的に確かめては助言を与え、船がスピードを最大に上げたときには、今日は寒くて風も強いが、魚雷艇に乗って海兵たちと共に航行すると気分が爽やかになると言って、随員たちの緊張をほぐした。

そして、長時間の戦術訓練を終えて軍港へ戻った際は、今日のように風が強く波が高いときには船を埠頭に係留しがたいのだと言い、正しい係留方法も教えた。

その数日後、総書記は党中央委員会の一幹部から、荒波立つ海に出て寒風にさらされながら魚雷艇に乗っている総書記の姿をテレビで見た人民の反響についての報告を受けた。

しばらく窓の外に目をやっていた総書記は静かな口調で言った。

――その道は雨の日も雪の日も私が必ず行かなければならない道である、金日成同志が歩み、金正日同志が歩んだその道は私が行くべき道なのである、私は金日成同志と金正日同志が一生涯歩んできた革命の道を最後まで歩み続けるだろう。

島防御隊長に寄せた信頼

2012年4月某日、金正恩総書記は祖国の東海関門を守る麗島(リョド)防御隊を視察した。

この日、総書記が深い関心を向けたことの一つは軍人に対する給養活動だった。

「兵士院」と副食物貯蔵庫をはじめとする給養施設を見て歩き、防御隊が自力で建てた無熱源ビニールハウスにも立ち寄った総書記は、見ただけでも気分がよくなる光景に出会った。

シュンギクやチシャなどの野菜が所狭しと育つ温室の中を満足げに眺める総書記に、防御隊長をはじめとする随員たちが、無熱源ビニールハウスを作って利用せよとの最高司令官同志のお言葉通りに温室を自力で建てて、冬中新鮮な野菜を切らさず軍人に食べさせていると自慢した。

彼らの話を聞いた総書記は楽しそうな口調で、ご苦労さんでした、このように温室を作ったのはなんと素晴らしいことですか、と言ってたいそう喜んだ。

このとき、随員の一人が、防御隊長が数十年間もここで服務しながら島を要塞化し、英雄になったと言った。

総書記は、そういう表彰を受ける資格がある、今日ここに来て良心的な指揮官に会えたことが一番嬉しい、あなたがこの離れ島で数十年間、戦闘準備と軍人の生活を改善すべく献身していることに感謝する、と述べた。

あなたのような良心的な指揮官がいるため、麗島は安心できると言った総書記は、防御隊長の額に刻まれた小じわにじっと目を止めた。

そして、防御隊長の顔に小じわが多くある、あれは母親のしわそのものだと言って語を継いだ。

「小じわが多くあるのを見るとたいへん苦労したようですが、防御隊長は良心的な人です」

総書記は彼の肩をやさしく叩き、本当に多くの仕事をやり遂げたと重ねて称えた。

総書記の顔には始終、喜ばしげな微笑が絶えなかった。

長時間にわたり部隊の各所を見て回った総書記は、防御隊長の年を聞き、いつまで防御隊長を務める気なのかと尋ねた。

殉職するときまで金日成主席と金正日国防委員長が防御隊に与えた教示をあくまで実行するつもりだという彼の答えを聞いた総書記は、慈しみ深いまなざしで眺めながら謝意を表した。

ところが、その次の語はあまりにも意外なものだった。

「あなたは70歳まで部隊長を務めながら立派な指揮官を育てて部隊を引き渡してから、私と一緒に10年間はもっと働く覚悟をしなければなりません」

しばらく口をつぐんでいた総書記は、信頼を込めてこう言った。

「私にはあなたのような幹部が必要です」

総書記は、その後も麗島防御隊を再び訪れ、ここの防御隊長は仕事熱心な指揮官、全軍の指揮官が見習うべき模範だとし、共和国英雄である防御隊長と部隊政治委員に労働英雄称号を授与することを提議した。

それればかりではない。

急病で生死の境をさまよっていた彼の蘇生を図ってヘリを飛ばして新しい生命の活力を与え、誕生日の祝膳や高い階級も贈るなど、彼が老いた身でも軍服を脱がずに党に忠誠を尽くすよう導いた。

夜に行われた品評会

2013年5月16日の夕刻、人民軍の某食品工場に対する現地指導から帰った金正恩総書記は、同行していた幹部たちを再び呼んだ。

笑顔で幹部たちに席を勧めた総書記は、今日工場を見て満足した、機械のうなりが高く響き、食品が次々と流れ出るのを見て、社会主義への信念をさらに強めた、と述べた。

そして、一幹部に視線を移し、今日、工場の製品を持ってくるようにと言ったが、どうなったのかと尋ねた。

醬油と味噌、マンネギ（化学調味料）などいろいろな食品を持ってきたという報告を受けた総書記は、一緒に味を見ようと言った。

みんな驚いた。

（それじゃ工場製品の味を確かめるために、夜中にわれわれを呼んだのだろうか）

彼らの脳裏には、総書記と共に工場を見て回るときにあった一つのことが思い出された。

この日、工場の各所を一つ一つ見て歩きながら、生産状況を具体的に確かめた総書記は、生産された製品を自分が直接味わってみようと約束した。

こうして、平凡な兵士たちに供給される基礎食品の質を評する風変わりの品評会が用意され、工場の製品がここまで運ばれるようになったのであった。

幹部たちを見回していた総書記は、工場に行ったときに圧搾菓子を味わってみたが、持ち味がなかったと言った。

一幹部から圧搾菓子の糖分含量を聞いた総書記は、どうしても糖分をもっと入れなければならないと言い、マンネギの味を見ては軽くうなずいた。

「マンネギの味はこれぐらいなら結構です。マンネギ職場で見たときには、小麦粉のようにあまりにも細かくて質の低いものだと思ったのに、そうじゃありませんね」

そして、工場で生産されたマンネギを軍人たちに供給していることは結構なことだと称えた。

幹部たちはほっとしていたが、それは長続きしなかった 。

醬油の味を見ていた総書記の顔色が曇ったのである。

「醬油の味が芳しくない。塩味しかありません」

水飴を入れたためだという答えを聞いた総書記は、それにも原因があるだろうが、醬油を作るときに原料の比率を適切に保っていないことにもある、と言った。

かなりの時間が過ぎ、夜は更けていった。ところが、様々な食品の味見をしながら辛味と甘味の見分け

もしたり、品質の向上と生産正常化のための方法も示したりする総書記の指導は続いた。
　総書記は豚肉の缶詰を味わって、「缶詰が美味しいです」と言った。
　そして、周りの人たちに味見をさせ、これから缶詰の蓋にプルタブをつけ、それを引くと蓋が開くようにしてみるべきだと言った。
　また、工場の原料の供給状況について聞き取っては、総合加工職場で豚肉加工品を正常に生産できるよう豚肉の供給対策も講じるべきだとして、その場で具体的な対策を講じた。

逆になった自慢

　2013年5月のある日、金正恩総書記は人民軍のある部隊を視察した。
　部隊指揮部の各所を満足げに見て歩いた後、将校住宅区域へ足を運ぶ総書記の後に続く一指揮官は気をもんでいた。
　（敬愛する最高司令官同志がどの家に立ち寄るのだろう。わが家を訪れたら本当によかろうに……）
　総書記は彼の気持ちを察したかのように、彼の家を

指しながらこれは誰の家なのかと聞いた。
　驚きのあまり呆然としている彼に代わって、部隊の責任幹部が答えた。
　すると総書記は、家の中に入ってみよう、と言って歩みを進めた。
　彼はまるで夢を見ているようであった。
　自分の願いがこのように叶えられるとは。……
　中へ入った総書記は、分家したわが子の家を訪れた親の気持ちで広間や台所を注意深く見回した。
　そして、居間の壁に掲げてある大会の記念写真を見ては、微笑を浮かべて、大会の記念写真が二つもあるね、いつどこで勤務しながら大会に参加したのか、と尋ねた。
　指揮官の答えを聞いた総書記は、君がどこに写してあるのか指してみるようにと言った。
　思いがけない幸運に興奮しきった彼は、写真の中で自分の顔をすぐ見つけられず、手探りばかりしていた。
　慈しみ深いまなざしで彼を見つめていた総書記は、ほら、見てごらん、自分の顔も探せないんだと言って、豪快に笑った。
　室内にどっと笑い声が起こった。

笑いの中で天井の高さにも注意を向けて必要な対策まで講じた総書記が外へ出たときだった。

先まで写真の中で自分の顔が見つからなくて困った顔をしていた当の指揮官は、どこからそのような勇気が出たのか、総書記の腕を取り、一つお願いがあります、と言った。

何かと優しく尋ねる総書記に彼は、軍隊に服務しているわが子に敬愛する最高司令官同志がわが家を訪れ、記念写真を撮ったことを自慢したいと言った。

すると総書記は明るい微笑を浮かべて、息子が手柄を立てて親に自慢するべきであって、親が息子に自慢することもあるのかと言って豪快に笑った。

こう言われてみるとまったく逆になった自慢なので、彼は顔を赤らめ、周りの人たちはまた大笑いした。

笑いが収まると総書記は、彼の腕をつかんで傍に立たせながら親しみを込めて言った。

「君の家に来た記念に、家を背景にして家族写真を撮りましょう。最高司令官と共に撮った家族写真を軍隊の息子に送るとさぞ喜ぶでしょう」

指揮官は総書記に向かって、「敬愛する最高司令官同志、本当に有り難うございます」と礼を述べた。

こうして、指揮官とその家族は総書記と共に記念写真を撮る光栄に浴したのである。それから数日後、父の自慢をしたためた手紙が哨所のわが子に届いた。

その手紙を読んだ兵士の心中がどんなものであったかは、ここで改めて説明するまでもない。

この話は、総書記の絶え間ない革命指導の道に刻まれた数々のエピソードの中の一つに過ぎない。

科学者のための休養所

2014年1月14日、国家科学院の視察を終えた金正恩総書記が、いっときの休息もとらず再び現地指導の途についたことは誰もがよく知っている事実である。しかし、総書記がその現地指導の道でどれほど労苦を重ねていたかは知られていない。

その日、長時間にわたる国家科学院の視察を終えて発つ総書記を見送った国家科学院の責任幹部は、総書記の車が見えなくなった道に長いこと立ちつくしていた。

このとき、一幹部が彼を呼びながら早く行こうと促すので、訳も分からずついて行った。

しばらくしてある鉄道駅に到着した国家科学院の責任幹部はわが目を疑った。

彼を待っていた総書記が手を振って招くのであった。総書記が彼を再び呼び寄せたのは、新しく建設する科学者休養所の敷地を一緒に確かめるためだった。

彼は総書記に随行することになった喜びに胸をふくらませた。だが、自分の行くべき道がどんなに険しい道なのかはまだ知らなかった。

しばらくの間走り続けていた列車は、ある鉄道駅で止まった。

列車を降りて車を乗り換えた総書記は目的地に向かった。その道は文字通り道ならぬ道だった。でこぼこしてひどい埃が立つので、車は何度も止まった。

そのたびに総書記は地図を開き、運転手に道を教えた。ようやくある場所にたどり着いて車を降りた国家科学院の責任幹部は、またもや驚かざるを得なかった。

車は埃だらけで、枯れ葉が散らかっている周辺の山の斜面や谷間の所々に残雪が見えているだけで、まともな小道さえなかった。

しばし周囲を見回していた総書記は随員たちに、時間がもったいない、近道をしようと言い、先に立って草藪の中に足を踏み入れた。

やがて一行は景色のよい延豊（ヨンプン）湖畔にたどり着いた。

そこの美しい景色を眺めながら随員たちは皆嘆声を上げた。

周辺に目をやりながら湖畔を歩いていた総書記は、ふと立ち止まってファイルを開いた。そこにはいろいろな休養所の形成案があった。

設計部門の幹部を身近に呼んで形成案の長所と短所をいちいち指摘した総書記は、一番よい案を選んでもう少し手直しするようにと指示し、国家科学院の責任幹部に、今日あなたをこの延豊湖に連れてきたのは、科学者たちの休養所予定地を見せるためだと言った。そして、この敷地が気に入るのかと尋ねた。

彼はもう一度周辺を見回した。先も感じたことだが、延豊湖が一目に見渡され、周辺には松をはじめ様々な樹木が生い茂っていて、休養所の敷地としてはうってつけの場所だった。

彼は感動した声で、本当にうってつけの場所です、今日、大きな恩沢にあずかりましてどう感謝したらよいか分かりません、と答えた。

総書記は、科学者休養所の適地を定めるために、昨年の夏に2度も船に乗って延豊湖の周辺を見て回った、そうしてこの場所を見つけたと言った。

その言葉にみんなは大きな感激にひたった。

総書記が科学者休養所の適地を見つけるために何度もここを訪ねたとは思いもよらなかったのである。

総書記は幹部たちに、延豊湖畔に定めた敷地は科学者休養所の予定地としては最適の場所だ、夏に来てみたときは空気が澄み、樹木が青々と茂り、景色が素晴らしかった、今日来て見ると、冬の風景もそれに劣らず素晴らしいと大いに満足し、科学者休養所を建設する際にはここへ来る道路を舗装して埃が立たないようにすべきだ、と強調した。

そして、科学者たちが十分に休息できる条件を提供するならば、彼らは科学研究活動でさらなる成果を収めるはずだ、われわれは科学者のためのものは全て最高のレベルで提供しなければならない、と改めて強調した。

今日、延豊湖畔の科学者休養所は、総書記によってもたらされた科学者、技術者のための「金の座布団」と呼ばれている。

行事場で気を遣った農業問題

金正恩総書記は、人民により裕福で幸せな生活を享受させるために、常に国の農業生産に深い関心を払っている。

2014年5月のある日。ある道党委員会の責任幹部は総書記の電話を受けた。彼のあいさつを受けた総書記は、行事があるから朝に行事場に到着するようにと言った。

責任幹部は即刻行事場に向かった。

そこでは重要な行事が予定されていた。

行事が始まる前に関係幹部たちとあいさつを交わした総書記は、道党責任幹部のあいさつにもにこやかに応えた。

しばらく行事場の全景を眺めていた総書記は、一幹部に聞いた。

「今日の天気予報はどうですか」

彼は、今日は晴れで、数日後には雨が降るそうだと答えた。

総書記はたいそう満足した顔で、誰にともなく、この頃の雨は農作物の生育に最適な慈雨だと言った。

その瞬間、総書記が農業にいかほど気を遣っているかを痛感した道党責任幹部は、道の営農問題で肩の荷が重くなるのを覚えた。

実際、春に入って何回か雨が降ったとはいえ、その後は干ばつ気味で春の種播きに少なからぬ支障を来たしていた。そうした不利な気候条件の下で、当面の営

農工程を進めなければならなかった。

そうした中で、道内の農業部門の幹部と勤労者は一年の営農でかなめとなる春の種播きを成功裏に終えた。

おりしも数日間にかけて道内の全地域に春雨がかなり降り、農作物の苗立ちに有利になっていた。

道党責任幹部は、農業問題で気を遣う総書記の心労を少しでも軽減したい思いで、このたび道に平均20ミリの雨が降って乾いた土地がすっかり湿り、枯れかけていた農作物が全般的に生き返って初期の生育によい影響を及ぼしていると説明した。

総書記は待ち望んでいた吉報に接したかのように、他道の降雨量は少ないが、その道には雨が沢山降ったとたいそう満足した。

そして、降雨量が20ミリほどなら多く降ったわけだ、その雨によって乾いた土地が十分に湿り、枯れかけていた農作物が全般的に生き返ったのは結構なことだ、と言った。

道党責任幹部は、なんとしても今年の営農に力を入れて、道に課された国家の穀物生産計画を無条件に遂行すると決意した。

総書記はうなずき、懇ろに語った。

「今年の農業を立派に営んで道に課された穀物生産計画を必ず遂行すべきです。われわれは今年にきっと豊作をもたらして、人民の食の問題を解決しなければなりません」

長山館が伝える話

2014年10月28日、金正恩総書記は立派に完工されて開業を間近にしている軍人食堂（当時）を訪れた。

満面に笑みをたたえて新設された食堂の全景を眺めていた総書記は、軍人食堂には金日成同志と金正日同志の不滅の指導業績が他の単位より多く秘められていると感慨深げに言った。

やがて、食堂のある食事室に入った総書記は、内部を見回しながら国家宴会を催しても申し分ないだろうと満足した。

随員たちが皆その通りだと肯定すると、総書記は食堂の責任者に、今は食堂を大きく改築したのだから、それに似合うように冷麺の質を高め、サービス水準も上げるべきだ、冷麺の質を高めるには調理師の陣容を固め、彼らの技術・技能水準を一段と高めなければならない、と言った。

そして、「玉流館（オンリュ）や清流館（チョンリュ）に行って偵察をするのも悪くないんです。戦闘では偵察が基本ですよ」とユーモラスに言った。

座中には楽しい笑い声が上がった。

総書記は、今日軍人食堂にせっかく来たのだから冷麺を賞味しようと言って自ら冷麺を注文した。軍人たちに出す普通の冷麺の味を見た総書記は、麺の太さや蕎麦と澱粉の混合比率など冷麺の独特な味を生かすコツを一つ一つ教えた。

総書記は、冷麺を作るからには美味に調理して軍人たちに出す考えをすべきだ、軍人たちが美味しい冷麺を食べるためにやって来るようにすべきであって、腹ごしらえのために来るようにしてはならない、と念を押した。

そして、近いうちに麺コンクールを催すつもりだと言った総書記は、次のように言った。

「軍人食堂では冷麺の質を高めて、玉流館と堂々と競争しなければなりません」

食堂の責任者は冷麺の質を一段と高めてみせると決意した。

食堂を後にするとき、総書記は再び強調した。

「軍人食堂で冷麺の質とサービスの向上を図って、軍人が好んで訪ねてくる食堂にしなければなりません。軍人食堂の調理師のための伝習を必ず手配します」

そうして、有名な調理師たちが軍人食堂に来て冷麺の質を高める伝習を行った。

その後、軍人食堂の調理師の水準を確かめるために軍人食堂の冷麺の味を見た総書記は、本当に美味しい、もう安心できそうだ、軍人食堂が平壌市で冷麺の味が一番よい食堂になることを望む、と言った。

いつだったか、総書記は軍人食堂の冷麺を平壌市民も賞味できるように軍人食堂の分店を新設して平壌市民にサービスする措置を講じ、軍人食堂の名称を玉流館と堂々と競争せよという意味で自ら「長山館（チャンサン）」と命名した。

今日長山館は、軍人だけでなく人民も好んで訪ねる食堂になった。

変更された遊覧航路

2015年7月のある日、東海岸のある飛行場で高麗（コリョ）航空総局（当時）の業務について語っていた金正恩総書記は、総局の責任幹部に飛行機による観光遊覧を行うべ

きだと言った。

総書記は、深い感慨にふけって続けた。

——金日成同志は祖国解放戦争後、国情があれほど困難な状況の下でも人民が飛行機に乗って平壌上空を遊覧する措置を取った。金日成同志の念願を実現する意味でもそうだし、人民に滅私奉仕することを最優先、絶対視するわが党の活動原則にもかなうように必ず観光遊覧飛行を行わなければならない。人民が飛行機に乗って、日ごとに変貌する革命の首都平壌の素晴らしい姿を見下ろすと、民族の誇りと自負が一層高まるだろう。……

その日、総書記は高麗航空総局の責任幹部に、飛行機による観光遊覧を行う上で提起される問題を十分に検討し、文書で報告するよう指示した。

数日後、総書記はその幹部を呼んで、高麗航空総局が遊覧航路を設定し直さなければならない、遊覧飛行に関する総局の報告文書を見たが、航路が適切に設定されていない、私が飛行操縦シミュレーターを利用し、総局が設定した遊覧航路に沿って模擬飛行をしてみた、と語った。

総局は首都の安全保障や経済的バランスを考慮し、平壌市郊外を飛行する航路を設定したのである。

総書記は、旅客機が平壌市上空を飛行するように遊覧航路を設定して、人民が日増しに見違えるほど変貌を遂げている平壌市の全景を俯瞰するようにすべきである、そして西海（ソヘ）閘門や、よい季節には九月（クウォル）山などの名勝も遊覧できるように航路を加えて、人民がわが国の美しい自然景観を思う存分俯瞰できるようにすべきだ、と言った。

総書記は、自分の了見が狭かったと自責する幹部に、われわれが人民のために決心してやることだから、どうせなら遊覧航路を増やして人民を喜ばせるべきだと言った。

こうして遊覧航路には首都平壌の中心部はもちろん、西海閘門と九月山などの名勝が加わるようになった。

数日後、高麗航空総局を再び訪れた総書記は、遊覧航路は大同（テドン）江に沿って設定するのがよかろう、最近、大同江畔にわれわれの時代の記念碑的建築物が数多く立ち上がったが、人民が飛行機に乗って遊覧飛行をしながら様変わりしている平壌の姿を俯瞰すれば喜ぶだろう、と言った。

そして、遊覧飛行機の選定や遊覧飛行についての広告問題、飛行機の内外部の管理と整備・点検を手抜かりなく行っていささかの欠点も現れないようにする問

題、責任幹部たちでテスト飛行を行い、どうすれば人民をより楽しませるかを研究する問題、飛行後に人民に民族料理と有名な料理をサービスする問題に至るまで具体的な指示を与えた。

遊覧飛行開始の前日の夕方、一幹部から全ての準備が完了し、翌日から計画通りに観光遊覧飛行が始まるという報告を受けた総書記は、窓越しに首都の夜景を眺めながら、平壌上空遊覧飛行は金日成同志の人民的施策の継承だと言える、金日成同志は戦後復興建設の困難な時期にも人民のために平壌上空遊覧飛行を行うようにしたのに、今日、われわれに何が足りなくてその素晴らしい人民的施策を実行できないだろうか、平壌上空に遊覧飛行機が飛ぶのを見ると、年を取った人たちは金日成同志を偲んで涙ぐむだろう、と言った。

総書記は、不夜城をなした首都の市街からいつまでも視線を離せずにいた。

2015年11月8日、人民を乗せた初の遊覧飛行機が青空に向かって飛び立った。

喜びと楽観に満ちた若者たちの歓声、若さを取り戻した老人たちの笑い声……

それこそ幸せな人民の姿であった。

「地下平壌」に秘められた話

2015年11月19日の夜。

先日、金鍾泰（キムジョンテ）電気機関車連合企業所で新たに製作した地下鉄電車を見て試運転のときに乗ってみようと言った約束を守って、金正恩総書記は深夜に現地に出た。

満面に笑みをたたえて地上の凱旋（ケソン）駅に入った総書記は、出迎えた幹部たちと握手を交わし、新たに製作された地下鉄電車に乗ってみるために来たと言った。

一幹部から地下鉄を利用する人民の便益を図って自動ゲートを設置したという報告を受けた総書記はたいそう満足した。総書記は、連結通路からホームに降りる階段の途中で歩みを止め、地下駅の構内を見回した。

当時、地下鉄は建設して久しい上に、改修が適時に行われていないため、不備な点が少なくなかった。

アーチ型の天井をしげしげと見上げていた総書記は、天井があまり高すぎる感じがする、天井を少々低くすべきだ、と言い、次のように強調した。

——地下鉄駅の設計を改めなければならない。ホー

ムの天井を低くし、ホームの柱の間にベンチも置き、空港ターミナルビルのようにテレビも設置しなければならない。……

幹部たちは、数カ月前に新築された平壌国際空港ターミナルビルの全景を思い浮かべた。

民族的特性が生かされた空港の門柱、国際基準に合わせて整えられたホールと各種のサービス施設、見るほど素晴らしい地下駐車場と高架道路……

総書記は、新たに製作された地下鉄電車に乗り、凱旋駅から栄光（ヨングァン）駅までの区間を往復しながら、地下鉄電車の性能を高める問題、地下鉄の管理・運営上の問題についてこまごまと教えた。

やがて、総書記が乗った地下鉄電車は試運転を終え、凱旋駅に戻った。

地下鉄電車の運転室に入り、操縦スクリーンをタッチ式に改造したのを見た総書記は、地下鉄電車を製作するからには世界的な水準のものに作らなければならない、われわれは地下鉄電車を立派に作って、地下鉄電車の生産で先進国の隊列に加わるべきだ、と言った。

やがてエスカレーターに乗って地上駅に上がった総書記は、自動ゲートの前で歩みを止め、地下鉄駅の自動ゲートは空港ターミナルビルのもののように設置すべきだと再び強調した。

その日の総書記の指示によって地下鉄の全ての駅に自動ゲートが設置され、全ての地下鉄駅を改装するための展望設計図も作成された。

2019年のメーデーを迎えて一風変わった姿を現した凱旋駅がオープンし、続いて平壌市内の各地下鉄駅が一つ一つ立派に改装されて市民たちを喜ばせている。

北辺の空に響き渡った万歳の声

2016年、咸鏡北道は解放後の気象観測以来初めての豪雨と突風に襲われ、豆満（トゥマン）江の水位が危険水位の2.5倍も高くなり、多くの市・郡が大きな水害を被った。

数十万メートルの道路と鉄道、橋梁が甚だしく破壊されて土砂に埋もれ、数万世帯の住宅と公共建築が倒壊し、多くの人々が家を失くして途方にくれる非常事態が生じた。

金正恩総書記は、災害地域に投入された人民軍部隊と突撃隊が復旧作業を展開した当初、すでに数多くの設計家が動員されたにもかかわらず、さらに設計陣を補強するよう指示した。

実際、一番緊迫で作業量の多いのは設計部門だっ

た。住宅と公共建築、上下水道網、さらには学校と幼稚園、託児所の垣根や窓枠の製作までも設計の作成から始まるのである。

短時日のうちに多くの設計案を作成しなければならない過重な課題を前にして設計家たちが速度にのみ汲々としているとき、総書記は、いくら設計量が膨大だとしても遠い将来にも遜色のない建物を設計すべきだという責任感を深く植えつけた。そして、ほとんど毎日のように報告される設計案を一つ一つ検討した。

一日におよそ46件の設計案を指導した日もある。

それぞれ細部に至るまで具体的に作成されていたので、設計案の量は実に膨大なものだった。

しかし、総書記はその設計案を毎日のように一つ一つ検討し、修正方途まで示した。

総書記が人民軍部隊を視察したと報じられた11月初めのことである。

設計家たちは総書記が前線視察中だから、この日だけは時間がないだろうと思っていた。

ところが、総書記は夜遅くまで多くの設計案を検討した。

設計家たちは熱情を倍加させて再び設計の作成に取りかかった。

総書記が北部被災地域を社会主義の理想郷、人民の幸福のすみかに建設する上で堅持するようにした鉄則は、設計に被災地の人民の志向と要求をしっかり反映させることだった。

被災地に新しい住宅が完成されるのを見た現地住民の中から、平屋や低層住宅にも押入れを作ってほしいという意見が出された。

総書記は、彼らの要求通り住宅別に適当な位置に押入れを作るようにした。

そして、住宅や公共建築の煙突を便利な位置に移してほしいという意見、炊事用の釜が小さいという意見など、住民の要求であれば大小を問わず一つもおろそかにせず対策を講じるよう計らった。

総書記が指導した咸鏡北道北部被災地域の設計形成案は合わせて920余件に達した。

設計形成案の作成は、咸鏡北道北部災害復旧建設の最初の工程に過ぎなかった。

総書記は、被災発生当初に強力な建設陣を編成し、セメントや鋼材、原木、燃料油、仕上げ材をはじめ災害復旧に必要な設備と資材を無条件に保障するための緊急対策を講じ、被災地域の住民に食糧と食用油、春秋用の下着や防寒服から台所用品と衛生用品、菓子

類に至るまで必要な物品を送り届けるための措置を取った。

水害を被った北辺にわずか2カ月の間に仙境村が立派に立ち上がり、11月には全国人民の関心と祝福の中で新居入りを祝う集会が行われた。

咸鏡北道北部の6つの市・郡で行われた新居入り集会には、住民と建設者、当該地域の幹部と党中央委員会の責任幹部たちも参加した。

責任幹部たちは被災地域の住民に住宅利用許可証を授与し、彼らを熱烈に祝った。

彼らは新居入り集会が終わった後、新しい住宅の主人と膝を交えて暮らし向きを聞き取り、生活用品も与えながら喜びを分かち合った。

新しい住宅を無償で提供されただけでも有り難いことなのに、総書記を補佐すべき幹部たちが自分らの家を訪ねて新居入りを祝ってくれることに、被災地域の人民は感激を抑えきれなかった。

新居入り集会には総書記の細やかな配慮がこもっている。

新居入りを前にしたある日、幹部たちと席を共にした総書記は、かつてなかった大災難を被った祖国の北辺に新しい街、新しい村を立派に打ち建てたと称え、

咸鏡北道北部被災地域の住民が新居入りをするとき、党中央委員会の責任幹部たちが方向別に現地へ出向いて彼らを祝うよう指示した。

総書記は、党中央委員会の責任幹部たちが自分の家庭で用意した家庭用品を持って新居入りする住民を訪ねて祝い、宣伝活動も行うべきだと言った。

こうして、党中央委員会の責任幹部たちが被災地域の住民と新居入りの喜びを分かち合い、彼らの家庭を祝賀訪問するために祖国の北辺へ出向くようになった。

北辺の人民が新居入りの喜びにひたっているとき、総書記は海風の強い東海岸の埠頭を歩いていた。

魚の塩漬けタンクの縁に腰を下ろし、人民に供給すべき魚を満足げに眺める総書記の姿をテレビで見た被災地域の人民は万歳の声を上げた。

新築された空港ターミナルビル

2016年12月、金正恩総書記は真冬の寒さをものともせず平壌国際空港第1ターミナルビルを視察した。

どの面から見ても遜色のないターミナルビルの各所を見て回った総書記は大満足し、平壌国際空港第1ター

ミナルビルを立派に建設した、設計も施工も上出来であり、われわれが発奮して平壌国際空港ターミナルビルを新しく建設するようにしたのがよかった、と喜んだ。そして、満面に笑みをたたえてターミナルビルから視線を離せなかった。

このとき、空港の幹部が平壌空港ターミナルビルを新たに建設した後、ここに以前には見られなかった新しい風景が繰り広げられたと言った。

何の風景かと聞く総書記に、幹部は結婚式を挙げるカップルが飛行機に乗って平壌市の遊覧飛行もし、空港ターミナルビルのあちこちで写真も撮っていると説明した。総書記は、人民が喜んでいるなら私も嬉しい、と言った。

しばらくして総書記は、われわれが苦労して空港ターミナルビルを建設し、新しい市街を打ち建てるのは何のためなのか、それは金日成同志と金正日同志が託したわが人民の幸福のためじゃないのか、わが人民にこの世で一番豊かな暮らしをさせようというのが私の決心である、と言った。

幹部の脳裏には、空港ターミナルビルを立派に改築するために昼夜を分かたず献身した総書記の労苦の日々が思い浮んだ。

総書記は埃立つ建設現場を訪れて新しいアイデアも教え、ときには電話で空港サービスについて説明もするなど心血を注いだ。

その日々には、旅客の便宜を最大限に図るのが基本であると教え、空港サービスで基本となる5大サービスについて説明した日もあり、建設現場を訪れて3階に上がる螺旋状階段の幅が狭く、曲線もきついので旅客に不便な思いをさせると指摘し、人民の便宜を最大に図るために設計を直すようにした日もあった。

総書記は空港ターミナルビルを長い間見て歩いた。

長い時間が経ったので、あまり無理をするのでないかと幹部が苛々していたとき、ふと総書記が観望食堂を運営しているのかと聞いた。観望食堂は、平壌国際空港を訪れる人々が周辺の景色を俯瞰しながら食事をするようにした総書記の措置によって作られたものだった。

運営しているという幹部の答えに、総書記は観望食堂に上がって見ようと言い、そこへ向かった。

地上から見上げても特色があるが、観望食堂に上がって見下ろすと、平壌国際空港の様相は新たな感興をそそった。

幹部たちが平壌国際空港の全景を俯瞰しながら感嘆

していると、総書記は、第1ターミナルビルの屋上に露台を作ると、そこで来客は休息をしながら清涼飲料も飲み、飛行機の離着陸も眺めることができてたいへん喜ぶだろうとし、設計家と討議して屋上露台を立派に作るよう課題を与えた。

空港の幹部は、長時間をかけてターミナルビルを見て歩く総書記に、あまり無理をなさらないで下さいと言った。すると総書記は、大丈夫だ、あなたたちが仕事に励んで空港サービス水準を一段と高め、わが人民がその恩恵をこうむって喜べばそれ以上望むことはない、と言った。

走行中の列車での指導

猛暑が続いていた2018年8月のある日。

金正恩総書記は陽徳(ヤンドク)郡への現地指導の途についた。

随員たちは総書記に列車で少しでも休んでもらいたいと切願したが、その願いは叶えられなかった。

総書記は列車の中でも国の農業問題で心労を重ねたのである。

石湯温泉(ソクタンオンチョン)駅に向けて走っている列車の車窓からはトウモロコシ畑が通り過ぎた。

しばらくトウモロコシ畑を眺めていた総書記は、一幹部に、高温による被害を被った面積はどのくらいなのかと尋ねた。

彼の答えを聞いた総書記は、高温による被害を癒すための対策を講じるべきだと強調し、ついで陽徳郡の責任幹部に、その郡でのトウモロコシのヘクタール当たりの収量を聞いた。

そして、到達すべきヘクタール当たりの収量を定めてから、営農方法を改善し、科学的な営農技術を取り入れなければならない、種子革命をして所定の量を収めるべきだ、と言った。

郡の責任幹部は、総書記の教え通りに郡の農業を指導してきたかを振り返って自責の念に駆られた。

営農方法の改善と科学的な営農技術の導入、種子革命は、総書記が一貫して強調する問題だった。ところが、これまで人海戦術にのみ頼り、ヘクタール当たりの収量を高めるための科学的な方途を見出して農業を正しく指導できずにいたのである。

総書記は、人海戦術に頼ってはヘクタール当たりの穀物収量を高めることができない、ヘクタール当たりの穀物収量を高めるためには、科学農業熱風を巻き起こして営農方法を改善し、地力を高めるとともに、肥

料などの営農物資を適時に供給しなければならない、基本は科学的な営農方法を取り入れることだとし、次のように言った。

——わが国の全ての農場で、党の要求する水準にまでヘクタール当たりの穀物収量を高めるためには、必ず科学的な営農方法を取り入れなければならない。科学的な営農方法を取り入れる場合にも、当地の特性に合わせて取り入れなければならない。……

総書記は郡の責任幹部に、西海岸の平野地帯のように農業に有利な地帯の営農方法をそのまま取り入れてはならない、わが国は地帯別に自然地理的条件と気象・気候条件が異なる、それゆえヘクタール当たりの穀物収量を高めるためには、地帯の特性に合わせて科学的な営農方法を取り入れなければならない、と強調した。

そして、科学的な営農方法を取り入れる上で地元の特性に合う品種の種子を植えるのが重要である、そのためにはその地帯に合う優良品種を積極的に取り入れ、現在の品種を多収穫品種に改良する必要がある、言い換えれば、種子革命を行うべきだ、と言った。

幹部は、人民の食糧問題、食の問題を解決するために心を砕く総書記の崇高な志を体して、郡の農業を決

定的に盛り立てて、地域内の人民生活に責任を持つ戸主としての本分を全うすることを誓った。

楽しく思い描いた人波十里

2018年8月のある日、金正恩総書記は元山葛麻（ウォンサンカルマ）海岸観光地区の建設現場を訪れた。

現地で総書記を迎えた幹部たちは、息の詰まるほど蒸し暑い日に総書記を土埃立つ建設現場に案内することになったのがもどかしくてならなかった。

彼らの気持ちをほぐすかのように総書記は、元山葛麻海岸観光地区の建設現場を見て回ってから3カ月も経たないうちに多くの仕事をした、建設に動員された軍人や建設者がたいへんご苦労だった、と褒め称え、長らく建設現場の全景を眺めた。

東海の青い水と広々とした砂場、新しい姿を現したサービス施設……

総書記は満面に明るい笑みをたたえ、幹部たちの気分も楽しくなった。

総書記は幹部たちを見回しながら、明沙十里こそこの世にまたとない名所だと言った。

そのとき一幹部が、明沙十里こそ素晴らしい場所で

す、自分たちは葛麻飛行場を建設するとき、すでに総書記が明沙十里に人民の立派な憩いの場を整える構想をしていたのではないかと考えました、と高ぶった声で言った。

すると総書記は、実はそれ以前からだとし、語を継いだ。

――海洋国であるなら、当然、海洋強国になるべきである。海洋強国の範ちゅうには、船舶が多く、海上運輸が発達するなどいろいろな表徴が属する。一方では、海を控えている優れた自然地理的条件を人民に享受させることも属すると言える。

総書記は幹部たちに、私は久しい前から海を控えているわが国の人民に海を通じた文化のおかげをこうむらせることができまいかと考えてきた、それで、どの面から見ても申し分ない葛麻半島の明沙十里に世界的な人民の憩いの場を整えることを決心した、と言った。

蒸し暑い真夏の日、それに気象観測以来、最高気温を記録する猛暑の中で総書記の衣服は汗でびっしょり濡れていた。

しかし、総書記は長時間にかけて建設現場を見て回りながら、人民軍が元山葛麻海岸観光地区の建設で人民の幸福の創造者、文明の開拓者、案内者になることと、建設の質をしっかり保障し、建築工事と共に緑化を同時に終えることなど綱領的な指針を示した。

やがて総書記は、明沙十里の海岸を改めて眺めながら満足した語調で言った。

「今後、明沙十里に世界的な人民の憩いの場が建設されれば、明沙十里が人波十里になるでしょう」

2024年の夏にも猛暑をものともせず元山葛麻海岸観光地区の建設現場を訪れた総書記は、わが国の一番有名な観光地として世界に堂々と誇れる国宝クラスの海洋公園が必ず立派に建設されて、明沙十里は間もなく元山の誇り、人波十里として魅力的な名声を轟かせるだろうと言った。

昔から山紫水明の天下第一江山と呼ばれてきたわが祖国は、人民を一番大事にする偉大な指導者によって、日ごとに素晴らしく様変わりしているのである。

地方工業革命ののろし

2020年10月1日、金正恩総書記は水害復旧作業が行われている金化郡を視察した。

この日、険しい泥道もいとわず長時間にかけて災害復旧現場を見て歩いた総書記は、地元の人民の住宅

建設だけでなく、地方工業の発展についても助言を行った。

総書記は、新しく立ち上がる住宅を眺めて満足している郡党責任幹部に、地方工業工場は幾つあるのかと尋ねた。

彼の答えを聞いた総書記は、金化郡では地方工業を発展させて郡内住民の物質生活を一段階引き上げなければならないと言った。そして、地方工業工場は郡経済の重要な元手だと強調した。

総書記は誰よりも興奮している郡党責任幹部に、江原道党責任幹部にも課題を与えるつもりだが、金化郡党委員会では邑地区はもちろん、里所在地と作業班の村が文化的に整えられるに伴って、地方工業工場を年次別に改造して、郡内住民の物質生活水準を引き上げるための事業を掌握して推し進めるべきだと言った。

総書記は同行した一幹部に、当該経済部門の活動家を加えたグループを金化郡に派遣し、地方工業工場の改造に必要な予算を見積もるようにすべきだとし、必要な措置を講じた。また、郡党責任幹部に、地方工業工場の改造を後押しするつもりだ、そうしてこそいくぶん気が休まるようだ、と言った。

郡党責任幹部は、地方工業工場の改造をなんとしても郡自体の力でやり遂げると言った。

すると総書記は、そんな必要はない、郡内住民の物質生活水準を一日も早く高めるのが重要だ、私が積極的に後押しするから、地方工業工場を改造して住民がその利にあずかるようにしよう、と言った。

郡党責任幹部はただ「本当に有り難うございます」と言うばかりだった。

総書記は彼に、今のように国が困難なときに何か余裕があって住宅を建設し、工場を改造するのではない、住民に対する教育を強化し、彼らが郡の主人という自覚を持って郡の経済を振興させるようにすべきだ、と言った。

これは、金化郡に限ったことではない。

全国の人民に豊かな暮らしをさせようと、社会主義の全面的発展の新しい歴史を開き、「地方発展20×10政策」の設計図を示して為民献身の不滅の道を歩み続ける総書記の指導の下、今、全国の至る所では近代的な地方工業工場が立ち上がっている。

140日と140年

2021年8月のある日。

着工してからわずか数カ月しか経たない短い期間に、普通江川岸地区は素晴らしい姿を現していた。

雨が降るその日、金正恩総書記は普通江川岸段々式住宅区の建設現場を視察した。

工事の状況に関する報告を受けた総書記は、建設現場の全景を眺めて、住宅区の建設が大いにはかどっていると満足した。

幹部たちは、段々式住宅区の配置計画案と鳥瞰図を一つ一つ指導し、240余枚の設計案も検討しながら、この建設が国の建築を一段階飛躍させる契機になるようにした総書記の労苦を振り返った。

幹部たちと共に建設現場の前の道路を歩いていた総書記は、傾斜の始まる所を指しながら、この住宅区が普通江を控えており、住宅が自然起伏に沿って建てられたのは見事なことだが、建物そのものがグリーン化していないと指摘し、斜面と建物の間に園林を造成し、砂防壁も装飾壁にするよう一つ一つ教えた。

斜面にまばらに打ち込んだ石を見た総書記は、手間がかかっても大きくて見栄えがし、観賞的価値のある岩を探して使うようこまごまと教えた。

この日、総書記はある住宅にも立ち寄った。

総書記は、書斎と夫婦部屋をのぞき、鏡台の椅子にも座ってみながら、住宅の内部が本当によく出来ているとたいそう満足した。

このとき一幹部が、本当に素晴らしいです、ホテルに勝るとも劣りません、と言った。

総書記はその言葉に喜んで、今や普通江川岸段々式住宅区の姿がすっかり現れた、140日前にはここにこのような近代的な住宅区がなかった、われわれが140余日間に近代的な段々式住宅区を打ち建てたように、今後140年を見通して人民の福祉のための決心を一つ一つ責任を持って下さなければならない、と言った。

140日と140年、これは単なる数字ではない。ここには金正恩総書記の最も高潔な人民観と未来観が集約されている。

咸鏡北道の人民に送った感謝

2023年9月のある日。

北辺の豆満江駅を出発した列車は、軽快な汽笛を鳴

らしながら目的地の首都平壌へと走り続けた。その列車には、ロシア連邦への公式親善訪問を成功裏に終えて帰路についた金正恩総書記が乗っていた。

列車の車窓からは美しい祖国の山河が流れ過ぎていた。

充実した稲穂のそよぐ田野、様々な形のこぢんまりした農村住宅、青々と生い茂った祖国の山河……

総書記は、その景色に見とれ、深い感慨にふけっていた。

列車が清津(チョンジン)市を間近にしていたときだった。

清潔な各駅の構内には、きれいに咲いた色とりどりの花の植木鉢が置いてあった。

それには、遠い外国訪問を終えて帰国する総書記に芳しい花の植木鉢を見てもらっていささかなりとも疲労を癒して上げたいという咸鏡北道の人民の切なる願いがこもっていた。

総書記は、全国の人民が共和国創建75周年を盛大に祝った自負と誇りを抱き、新しい勝利を目指して奮発する決意を固めていたとき、外国訪問の道についたのである。

総書記の外国訪問が報道されたときから、誰もが朝に起きて真っ先に『労働新聞』を読み、放送から流さ

れるニュースに耳を傾けた。

新聞やテレビで報じられる総書記の英姿を見ながら、全国の職場や家庭では総書記の話で花を咲かせていた。

ロシア連邦の国境駅ハッサン、ボストーチヌイ宇宙発射場、ガガーリン名称コムソモルスク・ナ・アムーレ飛行機工場、ウラジオストク市……

全国の人民が、総書記の訪問地の名を口ずさみながら総書記への慕情に駆られていた。

咸鏡北道の人民も総書記の帰国する日を指折り数えて待ち望み、北方の製鉄所と鉄山峰(チョルサン)、漁郎川(オランチョン)発電所などそれぞれの職場で革新を起こした。

また、帰国する総書記に自分らの誠意のこもった花の海を見せる一念を抱いて数万の花卉を用意した。

こうして、咸鏡北道の30余の駅の構内には芳しい花の植木鉢が置かれるようになった。

総書記が首都平壌に到着した翌日の9月20日。

咸鏡北道党委員会の責任幹部に電話をかけた総書記は、次のように言った。

「私がロシア連邦への訪問を終えて帰国するとき、咸鏡北道の人民が清津青年(チョンニョン)駅と鏡城(キョンソン)駅、漁郎駅をいろいろな花の植木鉢で真心を込めて飾った

とのことですが、人民の誠意を本当に有り難く思います。

道内の人民に私の感謝を必ず伝えてください」

これはまたたく間に道内の人民に広まった。

5. 次代のために

飛行機に乗った少年団代表たち

2012年6月、朝鮮少年団創立66周年慶祝行事を控えたある日。

高麗航空総局（当時）の責任幹部に電話をかけた金正恩総書記は、今回、平壌でわが党と人民の大きな関心と祝福の中で朝鮮少年団創立66周年慶祝行事が盛大に開催されるが、交通の不便な両江道（リャンガン）と咸鏡北道、羅先（ラソン）市の少年団員を全員飛行機に乗せて上京させなければならないと指示した。

前例のないことだった。

建国以来のまれな慶事だと幹部が言うと、総書記は、子どもたちのためなら何も惜しむことはない、これが金日成同志と金正日同志の次代観、未来観であ

る、私は金日成同志と金正日同志から委ねられた子どもたちを何の屈託もなく、これ見よがしに育てようと思っている、少年団代表たちを空路で輸送するための準備を綿密に行うべきだ、と強調した。

飛行機の動員可能性を再確認した総書記は、今回の慶祝行事に参加する少年団代表たちを輸送するための飛行を些細なミスもなく、責任を持って保障すべきだと言った。

こうして、少年団員たちは飛行機に乗って平壌へ向かうようになった。

幼い少年団員たちの胸は誇りと自負で充満し、教員や父母、幹部をはじめ多くの人々が感激の涙を流し、金正恩総書記万歳を連呼した。

その夕方、幹部はまた総書記の電話を受けた。

そのとき総書記は、飛行機に乗って平壌に到着した少年団代表の姿をテレビで見ながら、彼らのことを考えていた。

全ての少年団代表が大喜びだったという報告を受けた総書記は、自分の心も本当に嬉しいと大満足し、輸送で提起された問題はないかと再び尋ねた。

提起された問題はなく、予定した人員を全て輸送したという報告を受けた総書記は、ご苦労だった、高麗

航空総局が今回、少年団員のためを思う私の願いを叶えてくれて有り難う、慶祝行事が終わって少年団代表が帰るときにも飛行機に乗せて送ろう、と言った。

少年団代表の面倒をよく見てあげ、乗り物酔いの子どもがいれば直ちに対策を取るよう強調し、今日、ずいぶん苦労をしたとねぎらった。全国の祝福の中、慶祝行事が成功裏に終わった2012年6月8日夕、幹部を呼んだ総書記は、飛行場の天気を確かめた。

幹部から具体的な報告を受けた総書記は、天気を見て飛行の手配を責任を持って行うべきだ、一にも二にも最大に安全な飛行を保障することだ、と強調した。

そうして、少年団代表たちは飛行機に乗って無事に帰るようになった。

指導を重ねた野営所の改築設計案

2014年5月のある日、平安（ピョンアン）南道党委員会の責任幹部は金正恩総書記の電話を受けた。

幹部のあいさつを受けた総書記は、飛行場で行事があるから、朝、そこに来るようにと言った。

一刻も早く総書記にお会いしたい気持ちで、幹部は行事場に駆けつけた。

行事が終わったときだった。

道党責任幹部を呼んで道党委員会の活動について語っていた総書記は、延豊湖少年団野営所の改築に話題を移した。

総書記は、今の建物は建設して久しいから、野営閣として利用するようにし、子どもたちに多様な野営生活ができるように必要な建物を新設すべきだ、野営所の改築設計案を全般的に検討し、それを中央の有能な設計集団が現地に行って検討する案を立てて提起すべきだ、と言った。

幹部のまぶたには1年前の夏、延豊科学者休養所の敷地を定めるために延豊湖を訪れた日、少年団野営所をじっと眺めていた総書記の姿がまざまざと浮かんできた。

（あのときにもう延豊湖少年団野営所を立派に改築する構想を練っていたな）

幹部の考えは深まるばかりだった。

偉大な金日成主席は、延豊湖畔の景色のよい場所に少年団野営所の敷地を直接定め、建設に必要な全ての措置をもれなく講じた。

偉大な金正日国防委員長は、野営所が完工したという報告を受け、自らその名を「延豊湖少年団野営所」と命名し、音響設備と楽器、寝具類と野営所の管理・運営に必要な運輸機材、遊覧船などを贈った。

そして今日は、金正恩総書記が延豊湖少年団野営所を遠い将来にも遜色のない課外教育施設として建設するためにこんなにも心を砕くのではないか。

それから数日後の2014年5月13日。

平安南道のある工場への視察を終えた総書記は、再び道党責任幹部を呼んだ。

文書を一枚一枚めくっていた総書記は、延豊湖少年団野営所を改築・補修するための設計形成案を白頭山（ペクトゥサン）建築研究院に作らせて送ったが、不合理な点が少々提起されているようだと言った。

幹部は、延豊湖少年団野営所の改築・補修設計形成案で提起されている問題を今朝、文書で報告したと説明した。

「今、その文書を読んでいます」

総書記は、設計形成案がよく出来ていないので、今それを再検討し、修正するのに多くの時間を費やしていると言った。

続けて、延豊湖少年団野営所をはじめ全国の少年団野営所を立派に改築・補修すべきだ、そのためには設計形成案をしっかり作るべきだ、と強調した。

総書記はその後、絶え間ない現地指導の道を歩み続ける中でも、数回にわたって延豊湖少年団野営所の設計形成案を指導した。

こうして、野営所はその姿を一新し、延豊湖畔にはより美しい風景が繰り広げられた。

揺らんの子どもたち

2015年の正月元旦、金正恩総書記は平壌育児院と愛育院を訪れた。

総書記はここの幹部たちに、私は今日、愛情に飢えている院児たちと一緒に正月を過ごすべく、新年の辞を述べてから真っ先に平壌育児院と愛育院にやって来た、全国のかわいい子どもたちにより明るい未来があるよう祈ってみると、平壌育児院と愛育院の院児たちになおさら会いたくなった、と言った。

まず、育児院を見て回った総書記は続けて愛育院に足を運んだ。

低年3組の寝室を見て回った総書記が低年2組の教室に入ったときだった。

そこでは教養員のオルガン伴奏に合わせて院児たちが歌を歌っていた。

幸せに育っている自分らの喜びに満ちた生活を声高に歌っている院児たちの明るい顔を見ていた総書記は、一切の心配事を忘れたかのように満面に笑みをたたえた。

総書記はふと愛育院の院長に、今は昼寝の時間だろうに子どもたちを寝かせるべきではないか、と言った。

「大丈夫です。金正恩元帥様がお出でになったというのに、院児たちに昼寝をさせるわけにはいきません」

院長がこう答えると、総書記はかぶりを振り、私が来たからといって昼寝をさせないようなことがあってはいけないと思慮深く言った。

すると今度は、院児たちがわれ先に総書記にせがんだ。

「僕らは歌を続けます」「眠りたくありません」……

きらきらするまなざしで仰ぐ院児たちを愛らしく見回していた総書記は院長に、早く寝かせるようにと言った。

そして、揺らんで寝る院児たちの姿も見たいと言って、寝室へ向かった。

総書記は院長に、子どもたちが自分のベッドを知っているのかと聞いた。

みんな知っているという院長の答えに、総書記は院児たちに自分のベッドに上がってみるようにと、愛情を込めて言った。

こうして、院児たちは昼寝をするようになり、他人に遅れまいと競って自分のベッドに入り込んだ。そして、ふんわりとした布団に包まれて目を閉じ、すやすやと寝始めた。

総書記はそのときになって安心し、微笑をたたえた。院児たちの寝ている姿を見守りながら喜んでいる総書記の姿を仰ぐ院長の胸は熱くなった。

先ほど育児院でのことが思い浮かんだのである。総書記は育児院でも三つ子をわが胸に抱き、今は子どもたちの昼寝時間だから三つ子を早く寝かせるべきだと言った。

毎日、繰り返される院児たちの日課で、一日ぐらい昼寝時間を守らないのはたいしたことではなかった。まして、今日は祝日である上に、院児たちが指折り数えて待ち焦がれていた金正恩元帥様がお出でになった日ではないか。

ところが、総書記は院児の発育と保育にわずかな支障もあってはと、彼らの昼寝にあれほど気を遣っていたのである。

眠りについた院児たちの姿をやさしく見ていた総書記は、静かに他の場所へ歩みを移した。

水遊び場、内庭、遊戯場……

総書記は愛育院の各所を具体的に見て歩き、院児たちの生活にわずかな不便もかけないように深く思いを致した。

そのとき、院児たちは揺らんで深い眠りに落ち、美しい夢を見ていた。

あれほど子どもたちをかわいがる総書記は、その日、自分の心情をこう披瀝した。

――今日、院児たちの明るい笑顔を見ると、疲労が一挙に吹っ飛んだようだ、われわれが苦労はしたが、あんなに明るく笑う子どもたちを見るのはなんと素晴らしいことか、われわれがその気になって革命に励むのも、ほかならぬ子どもたちの笑いを守るためなのだ。

竣工式場に招いた青年たち

2015年10月、首都平壌では朝鮮労働党創立70周年を盛大に慶祝するための閲兵式の準備が行われていた。

閲兵広場を歩武堂々と行進する日を待ち望み、訓練

に励んでいる数多くの閲兵隊員の中には300余人の白頭山英雄青年突撃隊員もいた。

彼らは、党創立70周年慶祝閲兵式に白頭山英雄青年突撃隊の縦隊を参加させるようにした金正恩総書記の措置によって、竣工を前にした白頭山英雄青年発電所を離れて上京した突撃隊員たちだった。

訓練に熱中していたある日、彼らは全員直ちに平壌国際空港に到着するよう指示された。空港へ向かいながら突撃隊の指揮官は言うまでもなく、隊員たちも訓練の場所が変更されたためだろうと考えていた。しかし、空港に到着した彼らは驚かざるを得なかった。彼らに三池淵(サムジヨン)行きの航空券が配られたのである。

（党創立70周年慶祝閲兵式を数日後に控えているというのに、白頭山に戻るとは……）

いくら考えても疑問を解くことができなかった。

訳が分からず、互いに顔を見合わせている彼らに、一幹部は次のような話を聞かせた。

彼らが閲兵式の訓練に参加するために平壌に到着した数日後のことであった。幹部たちと席を共にし、党創立70周年慶祝閲兵式に関する指示を与えていた総書記はふと、白頭山英雄青年突撃隊縦隊のことを話題にした。総書記は、白頭山英雄青年発電所の竣工式当日に

平壌で閲兵式の訓練中の突撃隊員たちを飛行機に乗せて三池淵に送り、竣工式に参加させてから、再び訓練場に帰らせるよう具体的な指示をした。

幹部の話を聞いた突撃隊の指揮官と隊員たちは互いに抱き合い、感激の涙を流した。

彼らの脳裏には、完工を間近にした白頭山英雄青年発電所を訪れた総書記が、雄大にそびえた発電所のダムを眺めながら言った言葉が思い出された。

——見上げると天をもつく青年たちの気概を見るようであり、遠くから眺めると党中央を擁護するとりで、盾をなした青年大軍の姿を見るようである。白頭山英雄青年発電所の建設を通じて、党の決心はすなわち現実であり、実践であり、朝鮮青年は党の決心を貫徹する上で先鋒隊の役割を果たしていることを再び雄弁に物語っている。朝鮮青年の力は本当に強い。

総書記は、朝鮮労働党創立70周年記念日まではわずかしか残っていないだけに、工事を完璧に締めくくり、ここで勝利者の宣言である軍民青年大合唱を天地を揺るがすほど響き渡らせせよう、私がきっと観る、その日、第1号発電所のダムを背景に記念写真も撮ろう、と語った。

こうして、閲兵式に動員された突撃隊の指揮官と隊

員たちは白頭山英雄青年発電所の竣工式に参加し、総書記と記念写真を撮る光栄に浴した。

機動芸能宣伝隊員たちが受けた厚遇

2015年9月のある日、白頭山英雄青年発電所の建設者たちに見送られながら1台のバスが平壌に向かって出発した。そのバスには、金正恩総書記を喜ばせた白頭山英雄青年突撃隊の機動芸能宣伝隊員たちが乗っていた。

完工間近の白頭山英雄青年発電所を訪れ、白頭山英雄青年突撃隊の機動芸能宣伝隊員の公演を観て高く評価した総書記が彼らを平壌に呼んだのである。

車窓の外を眺める機動芸能宣伝隊員たちは、忘れ得ぬその日の感激が昨日のことのように思い出されて胸を熱くした。

それは数日前のことだった。総書記は発電所の各所を満足げに見て回りながら、酷寒の中で自然との戦争を繰り広げ、党から与えられた課題を決死の覚悟で貫徹した白頭山英雄青年突撃隊員たちの精神世界を高く評価し、機動芸能宣伝隊員の公演『白頭の青年の信念の歌』も観覧した。

機動芸能宣伝隊員は総書記の前で、自分らの心情を

詩や歌に込めて熱烈に吐露した。

公演が終わると総書記は、立派な公演だ、白頭の青年文化を創造した白頭山英雄青年突撃隊の機動芸能宣伝隊が確かに違う、と大いに称えた。

そして、数日前の青年中央芸術宣伝隊の公演も教育的意義のあるものだったが、今日、ここの機動芸能宣伝隊もそれに劣らず素晴らしい公演を行った、特に、ひたすらわが党のみを信頼し従おうとする青年たちの気高い精神世界を感銘深く見せた、と言った。

作業工具を持っていた手でアコーディオンの鍵盤を押してメロディーを一つ一つ覚え、高級楽器ではなく、ハーモニカで歌曲を奏でる彼らの公演は、専門芸術団の公演に比べるとあまりにも未熟で素朴なものだった。

しかし、彼らの公演を通じて白頭の青年の心から噴出する領袖への燃えるような慕情と高潔な衷情を読み取った総書記は、このように身に余る評価を与えたのである。

機動芸能宣伝隊員たちと記念写真を撮った総書記は、この機動芸能宣伝隊を平壌に呼んで公演を行うようにすべきだと言った。

数日後、総書記は幹部たちに、白頭山英雄青年発電所の竣工行事に関する諸問題について一つ一つ指示を

与えた後、こう語を継いだ。

「白頭山英雄青年突撃隊の機動芸能宣伝隊が平壌に来て公演を行うとき、 彼らに英雄待遇をすべきです」

総書記はその後、白頭山英雄青年突撃隊の機動芸能宣伝隊を羅先市の水害復旧建設現場に派遣して人民軍軍人を鼓舞激励する公演を行うようにした。

白頭の青年たちを平壌へ、また平壌から羅先戦域へ呼んで公演させたことには、白頭山地区に響き渡った彼らの歌をもって羅先戦域を揺るがして、水害復旧でも白頭山英雄青年の神話の炎を燃え上がらせ、全国が青年の活動でにぎわうようにしようという総書記の崇高な志がこもっていた。

白頭山英雄青年突撃隊の機動芸能宣伝隊員たちは、時代を激動させた白頭山英雄青年の神話の創造者らしく、平壌と羅先戦域で信念の歌、闘争の歌をもって首都の青年と軍人建設者を力強く励ました。

ミンドゥレ・ノート工場での頼みごと

2016年4月、新築のミンドゥレ・ノート工場を視察した金正恩総書記は、工場で生産されたノートを見て本当に嬉しい、上質のノートを受け取って大喜びするわが国の児童や生徒・学生たちのことを思うと踊りでもおどりたい気持ちだ、と大いに満足した。

そして、小学生用ノートを見ては、表紙に童話の中の動物を描き、裏表紙には時間割を書き込めるようにしたのもよかったと微笑み、図画用紙が積まれている所では紙の質が本当によい、子供たちがたいへん喜ぶだろうと言った。

また、デザインの創作室に立ち寄っては、ここで子どもたちの童心に合わせて表紙をよく作ったと高く評価し、工場の従業員たちはミンドゥレ・ノート工場がいかに重要な工場なのかをよく知るべきだと言って語を継いだ。

――ミンドゥレ・ノート工場で生産されるノートにわが祖国の明日が描かれるようになる。明日の強盛朝鮮は、この工場で生産されたノートを使いながら国の担い手に育つわが国の子どもたちのものである。この工場の生産の轟音が間断なく響いてこそ、国が栄え、全国に『われら幸せうたう』の歌声が高らかに響き渡るようになり、朝鮮式社会主義制度を固守していくことができる。

この日、総書記は幹部たちに、ミンドゥレ・ノート工場の操業が停止するのは全国に響き渡っていた『わ

れら幸せうたう』の歌声が絶えるも同然であるとし、子どもたちの明るい笑顔と幸福のためにこの工場の生産を瞬時も中止してはならないと切に頼んだ。

2度も延期された卒業式

2022年8月のある日のこと。

創立75周年を前にして万景台革命学院の幹部や教職員、生徒は歓喜に満ちあふれ、創立日を指折り数えて待っていた。ところが、創立日以前に卒業式が行われることを知った卒業学年の生徒たちは、記念行事に参加できなくなったことでひどく残念がっていた。

彼らは、学院の発展道程において意義深い日として記される創立75周年記念行事に参加してから卒業したいという気持ちを捨てきれなかったのである。けれども、教育綱領による国家的な措置なのでどうすることもできなかった。

そのようなとき、革命学院の幹部は思いがけない吉報に接した。

卒業学年の生徒たちが創立日以前に卒業することになったという報告を受けた金正恩総書記が、卒業式を延期してでも、彼らを記念行事に参加させるという措置を取ったというのである。

これを伝え聞いた学院の幹部の胸には形状しがたい感激がこみ上げてきた。

（卒業式を延期するとは……　こんなこともあるものか）

こうして、10月12日、総書記の臨席の下に全国の祝福の中で盛大に行われた万景台革命学院と康盤石(カンバンソク)革命学院の創立75周年記念行事には卒業学年の生徒たちも参加するようになった。

その日、全ての参加者がそうだったが、なかでも卒業学年の生徒たちの感激はひとしお大きかった。

記念行事に参加したことだけでも身に余る光栄なのに、総書記と共に記念写真を撮る幸運にもあずかったのだから、その喜びと感激をどう表現すればよいのか分からなかった。

その4日後の10月16日に卒業学年の生徒は卒業式を行い、新しい持ち場に向かうことになっていた。

ところがその日、総書記は数日前の記念行事に出席した際、週末にきっとまた来ると言った約束を忘れず、万景台革命学院を再び訪れた。

学院の全ての教職員と生徒は総書記を仰いで熱狂的な万歳の声を上げた。

その日、万景台革命学院の各所を見て回り、学院の教育実態を具体的に確かめ、貴重な助言を行った総書記は、卒業学年の生徒の撃術訓練について拳銃実弾射撃も見た。生徒たちが満点をとったときには明るい微笑を浮かべて真っ先に拍手を送り、射撃のコツも一つ一つ教える総書記の姿は慈父の姿そのままだった。

総書記は、射撃に参加した卒業学年の生徒たちと共に記念写真も撮った。

そして、生徒たちがすぐ卒業するとのことだが、写真を早くつくって彼らに贈るとともに、学院にすぐ明基牛を提供するからきっと牛肉を食べさせて休みを取らせ、その後に卒業させるようにと強調した。こうして、生徒の卒業式は再び延期されることになった。

人民愛の世界

編　集：卓成日、朴成日
翻　訳：金光哲、金正蓮
発　行：朝鮮民主主義人民共和国
　　　　外国文出版社
発行日：2025年6月

No.250880303613

E-mail: flph@star-co.net.kp

http://www.korean-books.com.kp

ISBN 978-9946-0-2448-6
9 789946 024486 >